

長谷川 章

AKIRA HASEGAWA

# イギリス田園都市と心霊主義

——星辰建築と円環の形而上学

Spiritualism and Philosophy of English Garden City  
——Astral Architecture and Metaphysics of Circle

本研究はヨーロッパ近代における建築ならびに都市を精神史のなかに解釈することを目的としている。既往の近代建築研究の歴史観では、戦後の合理主義の視座から逆照射し、形態主義そして作家主義による経時的解釈が歴史研究の普遍性を獲得してきた。しかしこうした歴史観においてさえ世紀転換期の非合理主義的な建築は歴史の傍流として解釈され、正当に位置付けられることがなかった。それ以上にその背景となる思想史あるいは宗教史あるいは本論で取り上げる精神史からの視点が黙殺され、建築や都市の実態がほとんど正当に解釈されてこなかった。本研究は既往の大文字の近代建築史の概念に対して疑義を呈するとともに、精神史の視座から新たな歴史の枠組を提示し、近代建築史の再構築を目指している。

本研究に着手した契機は、ドイツの建築家ブルーノ・タウトの表現主義建築家の名を不動のものとしたといわれる『アルプス建築』(1919)をとおして、世紀転換期ドイツの建築的状況を検証したことにある。結果としてそこに浮上してきたものは神秘主義思想であった。それは13世紀に生まれたドイツ神秘主義の思想を出自とし、19世紀ドイツ・ロマン主義を経て世紀転換期ドイツに展開した。

本研究では具体的にイギリスにおける田園都市運動をテーマとし、あらためて世紀転換期のヨーロッパの精神世界と建築あるいは都市との関係の検証をおこなう。

イギリスのヴィクトリア朝の時代には産業革命を経て都市化あるいは工業化が進み、様々な社会問題が出来た時代であった。その反動としてデカダンスや唯美主義などの芸術が生まれたと大文字の歴史では説明されている。しかしイギリスの19世紀後半から世紀転換期に至る時代とはドイツやフランスと異なり、心霊主義が社会を支配していた特異な状況であったことが知られている。神智学徒ハワードが田園都市を提案したのは、このような心霊主義が浸潤した世紀末ロンドンにおいてであった。

本研究では世紀末イギリスの都市や建築と心霊主義との関係をとおして近代という時代を再検証する。そのために都市が誕生した8世紀頃まで歴史を遡り、ヨーロッパ大陸において12世紀に始まるルネサンス運動との関係から近代までのイギリス精神史を整理し直すことから始める。すなわち新プラトン主義、ヘルメス主義あるいは占星術や

錬金術といった神秘思想と都市や建築との関係を、気候文明史を背景として、歴史を再構築し、その延長線上に世紀末のイギリス田園都市思想を心霊主義のなかに位置付けた。

このとき精神史と都市や建築を結び付けているのは形而上学的な円環や階層的連鎖という観念である。この観念はキリスト教世界あるいはプラトンの世界観を象徴するものとして紀元前から確認され、近代にいたる歴史のなかで文学や都市や庭園や建築のなかに顕現した。この円環の象徴的イメージを神秘主義ならびに心霊主義との関係の中に解釈し、精神史の視座から全く新しい近代建築史観を構築することを試みる。

本論の構成は以下の通りである。

## 第Ⅰ部 星辰建築と円環の形而上学

### 第1章 マニエリスム文学と円環の形而上学

#### 第1節 シェーアバルトとマニエリスム文学

#### 第2節 イギリス17世紀の形而上詩

### 第2章 円環の世界観とその系譜

#### 第1節 円環に表象された世界観

#### 第2節 存在の大いなる連鎖

#### 第3節 円環的世界観の終焉

### 第3章 ユートピア都市と星辰建築

#### 第1節 天上の世界と円環の形而上学

#### 第2節 形而上詩人の庭園

#### 第3節 植物園と占星術

#### 第4節 世界劇場と占星術

#### 第5節 ユートピア都市と記憶の円環

## 第Ⅱ部 イギリス田園都市と心霊主義

### 第4章 気候文明史からみた円環の形而上学

#### 第1節 気候と文明史

#### 第2節 極小期とルネサンス

#### 第3節 氷河期と円環の形而上学

### 第5章 心霊主義の時代

#### 第1節 人間中心主義の時代

#### 第2節 世紀末とイギリス心霊主義の時代

### 第6章 イギリス田園都市運動と心霊主義

#### 第1節 新教育運動と神智学

#### 第2節 田園都市運動と神智学

### 第Ⅲ部 『明日の田園都市』と心霊主義

### 第7章 『明日の田園都市』におけるモダニズム

#### 第1節 ハワードと心霊主義

#### 第2節 『明日の田園都市』の成立とその背景

#### 第3節 田園都市のダイアグラムと心霊主義

## 第 I 部 星辰建築と円環の形而上学

イギリス近代の都市や建築を論ずるまえに、第1章から第3章ではその前提となる18世紀啓蒙主義までの精神史を検証することから始める。この時代とはまだ神が存在した時代として特徴付けることができる。その精神史の世界観の特徴とは円環という観念に象徴される形而上学である。円環という観念は文学や庭園や建築や都市に顕現する。

### 第1章

#### マニエリスム文学と円環の形而上学

本論文執筆の契機はドイツの表現主義建築家ブルーノ・タウトに多大な影響をあたえた詩人パウル・シェーアバルトの小説である。そのシェーアバルトの文学における世界観の出自の一つとはマニエリスム文学であった。

#### 第1節 シェーアバルトとマニエリスム文学

シェーアバルトの宇宙幻想小説が東方の神秘主義あるいはドイツ神秘主義から強く影響を受けていたことは確かである。しかしヨーロッパ17世紀におけるマニエリスム文学もまた彼の文学に大きな影響を与えていた。

#### 1. パウル・シェーアバルトの『小遊星物語』

ブルーノ・タウト (Bruno Taut 1880-1938) が1919年に発表した『アルプス建築』は山岳をガラスにより建築化するという幻想的な主題から、歴史的にドイツ表現主義建築を代表するものとして位置付けられてきた。そのなかでも特異なものは第28葉といえるであろう。そこに描かれた宇宙生命としての惑星の図像の下には「球体！ 円環！

車輪！」と記されている。[図1] この文言は詩人パウル・シェーアバルト (Paul Karl Wilhelm Scheerbart 1863-1915) の『小遊星物語 (レザペンディオ)』(1913)からの引用であることが知られている。すなわち「あらゆるものがいよいよ回転しなくてはならない。永遠の回転が生みだす陶酔がまたしてもやってくる。回転する球体と車輪とがちっぽけなものどもの息の根を止める。前進！ 苦痛を恐れるな！ 死を恐れるな！ 球体だ！ 無限なるものだ！ 車輪だ！ 円！ 円だ！」(注1)

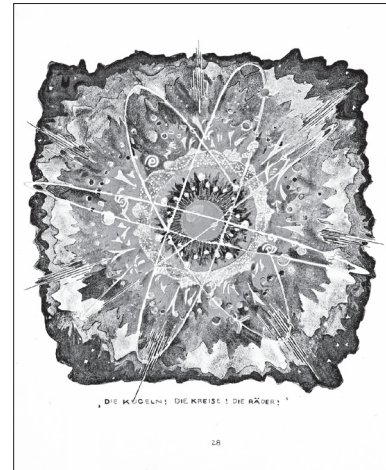


図1 『アルプス建築』第28葉「球体！ 円環！ 車輪！」、ブルーノ・タウト、1919年

ではシェーアバルト自身の文学作品における幻想的な世界観の源泉はどこに求められるのであろうか。その一つはオリエント文学である。彼は『千夜一夜物語』やオマル＝ハイヤームの『ルバイヤート』に沈溺し、東洋神秘主義の研究に没頭していた。その一方で彼が興味を抱いたのは16世紀から18世紀にかけて認められたマニエリスム文学である。もっとも惹かれたのは18世紀のスウィフトやラブレールそしてハインリヒ・チョッケであったといわれる。(注2)

#### 2. マニエリスム文学と円環

16世紀から18世紀のマニエリスム文学ではシェーアバルトの『小遊星物語』を彷彿とさせるような無数の表現に出会える。

例えばフランスの詩人騎士マリーノの詩では「光に、彗星に、恒星に、奇蹟に変貌する。しかしここでは休む間もなく多くの微小な球が回転している。」またマリーノの流れをくむ別の詩人では「自分の円環のなかに数々の小円環を包み込む。自分を追いかけている数々の球体を回転させている最高の球体が天界をまわっているように、巨大な車輪が自分と一緒に微細な車輪を回転させ、動かしている。」(注3)

ここにはマニエリスムの世界観が読み取れるであろう。マリーノがいうように「一切のものの偉大なる車輪が小さな輪のなかに存在している」というダイナミックな宇宙観は、まさにシェーアバルトの宇宙小説の世界に重合する。

しかし最も直接的に球や車輪や円環の世界観を詠いあげたのはイギリスのマニエリスムの詩人たちであった。

## 第2節 イギリス 17世紀の形而上詩

イタリアのマニエリスム芸術の中心は絵画や彫刻である。しかし文学の世界でも認められたマニエリスムが顕著な成果をもたらしたのはイギリスであったといえるであろう。彼らは形而上詩人と呼ばれていた。

### 1. イギリスのマニエリスム文学

マニエリスムという芸術様式の時代は、グスタフ・ルネ・ホッケに従えば、ルネサンスを代表とするラファエロが死んだ1520年頃から1620年頃までをさしている。その特徴は魔術的ともいえる万物照応の体系としての宇宙観である。恐怖あるいは比喩そして寓意による幻想的な表現が顕著である。それはルネサンスのアリストテレス的宇宙観や中世スコラ哲学から、絶対王政あるいはニュートンの機械論という啓蒙主義の時代へ至る、過渡期の芸術として位置付けられている。

ホッケの定義はおもに絵画や彫刻の芸術を対象としている。しかしマニエリスムの文学の領域において、その特徴である万物照応による世界観の表現が最も直接的に認められるのは、イギリスの17世紀のマニエリスム文学といえるであろう。

こうしたイギリスの詩人たちは形而上詩人 (metaphysical poet) と現在では呼ばれるのが一般的である。おおよそ17世紀初頭から1650年代後半を中心として、約30名の詩人がそれに該当する。エリザベス朝詩人の後継者である彼らを形而上詩人と名付けたのはジョージ・エリオット (George Eliot 1819-1880) が1921年に表した「形而上派詩人論」においてである。すなわち20世紀になって初めて、彼らは体系化され再評価され歴史上に位置付けられた。この形而上詩の特徴として指摘されているのは、人間と地球と宇宙の照応における円環のイメージの観念的世界観の表現である。そのような詩的表現が顕著といえるのは30名の詩人のなかでも以下の6名である。すなわちジョン・ダン (John Donne 1572-1631)、ヘンリー・ヴォーン (Henry Vaughan 1622-1695)、アンドリュー・マーヴェル (Andrew Marvell 1621-1678)、ジョージ・ハーバート (George Herbert 1598-1633)、リチャード・クラショー (Richard Crashaw 1612-1649)、エイブラム・カウリー (Abram Cowley 1618-1667) である。(注4)



図2 「建築家としての神」  
『フランス語聖書写本ビブル・モ  
リゼ (Bible Moralisée)』1220年、  
ウィーン国立図書館

### 2. ジョン・ダンの形而上詩における円環

イギリス形而上詩人の中では最も早い年代に属するダンの詩は、エリザベス時代の最後の10年に重なる。初期の詩はイタリア・ルネサンスの抒情詩の影響が認められたペトルカ風である。ダンの初期の詩の表現に特徴的なことは、宇宙からコインに至る円環の照応関係の観念的表現である。例えば詩「愛の成長」では「水の面が動き、一つの輪ができると、周りに、幾つもの輪が広がるように、愛は輪を広げる。それらは、多くの天空の輪、でも、空は一つ、すべては君を中心とした同心円に他ならない」と詠っている。(注5) この詩では自然に現れた水紋と、自らの魂の内部の風景と、宇宙の惑星の軌道における円環のイメージを重合させ、最後には小宇宙としての人間と大宇宙の天球が同心円をなす照応関係のなかに心情を詠っている。円や球への志向は現実から逃避し、形而下のエロティシズムを形而上的な天界へと結び付け、完全性や宇宙を統べる神の秩序を円環に象徴させていると解釈できるであろう。(注6)

こうしてダン は現実の社会から逃避して「恋人たちが共有する小空間」に永遠の現在を求め、そこへ世界の中心を地球から移してしまった。なぜならば形而上詩人たちは、無限に広がった新しい宇宙空間に対して恐怖とともに不安を覚えていたからである。かつて大宇宙を支配していた均整や調和はもはやない。混乱と不安の時代に形而上詩人はミクロコスモスとしての小世界を求めた。

ダンの詩「別れ：嘆くのを禁じて」では次のように詠っている。「もし、僕たちの魂が二つであるなら、コンパスの二本の脚のように二つだ。君



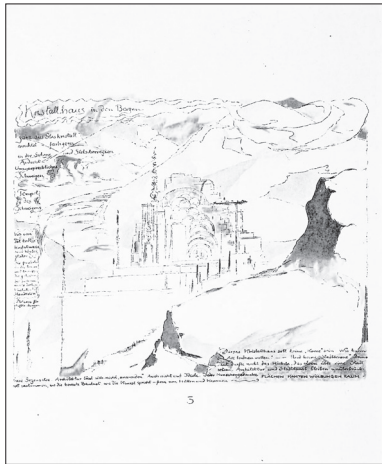


図3 『アルプス建築』第3葉「山中のクリスタルハウス」、ブルーノ・タウト、1919年

の魂は固定された脚、もう一方が動かなければ不動、動けば共に動く。」(注7)恋人をコンパスの脚に喩えて二人で愛の円を描いている。しかしこのコンパスとはかつて神が完璧な世界を創造するときに用いたものだ。[図2] コペルニクスが描いた天動説の世界観である。(注8)

### 3. ヘンリー・ヴォーンの神秘主義

神の被造物が暗喩する根源的な世界を瞑想することにより、神に近づくことがヴォーンの詩の自然神秘主義の特徴である。イギリス形而上詩人のなかで最も神秘主義的である。彼の詩は、19世紀のウィリアム・ブレイクの世界へとつながっていく。彼の宗教詩とでもいうべき詩の主題は大宇宙と小宇宙の円環的照応の世界観である。特に自然に内在する神の表現では、独特の世界観を構築している。彼は1650年から1655年の間に独特な「円環の詩 (circle poem)」とでも称するような数々の詩を生み出した。彼の代表的な詩「世界」では次のように神秘的宇宙観が漂っている。「私は永遠を見た。純粹で限りなき光の巨環のようであった。」「私は光によってすべてを見、地上と夜の真中に天と汝を見出す一つの真珠がある。」(注9)

彼の世界観は双子の弟であるトマス・ヴォーン (Thomas Vaughan 1622-1666) からの影響によるところが大きい。トマスは錬金術師であり魔術師であり化学者であった。トマスはスコラ哲学を批判し、新プラトン主義やヘルメス思想そして汎神論的思想に傾倒していた。彼は当時のケンブリッジ・プラトニストの一員であった。(注10) トマスによると、霊は新プラトン主義の解釈として光に象徴されている。その霊が「光の家」に入ると家

は透明となり光に輝く「水晶の城」となる。

こうした錬金術的な解釈はウィリアム・ブレイクの『水晶の小部屋』でもテーマとなっている。それは光を物質の中に閉じ込める錬金術の教義そのものである。(注11)[図3] ブルーノ・タウトが『アルプス建築』の第3葉で描いたクリスタルハウスをまさに彷彿とさせずにはおかない。

### 4. アンドリュー・マーヴェルの連鎖する円環

イギリスの形而上詩人のなかでも最も魅力的に円環の世界を描いたのはこのマーヴェルである。彼は当時ヨークシャーの屋敷アップルトン邸へと隠遁したトマス・フェアファックス卿 (1612-1671) の一人娘のメアリーの家庭教師を務めていた。この1650年から1653年の間にマーヴェルが生み出した抒情詩は、フェアファックス卿が傾倒していた新プラトン主義やヘルメス思想から大きな影響を受けていた。(注12)

マーヴェルの詩「一滴の露に寄せて」では「見よ真珠のような朝露が暁の懷から降り注がれ、花開くばらの中に落ちる」「天空から別かれ落ちて久しいと嘆く、自分自身の涙のように」「魂もまた永遠の日の澄んだ泉から落ちた一滴の露、一条の光なのだ。」「円環をなしてめぐる清らかな思想によって小さな天として大なる天を表す。」と詠い、小宇宙と大宇宙の照応理念をとおして〈露－涙－天球層－魂〉という円環のイメージの連環が表現されている。マーヴェルは一輪の花の球体の朝露の小宇宙のなかに大宇宙という完全な円環の世界を詠んでいる。(注13)

この一滴の露が地上から天へ昇しようとしている描写は、イデア界へと回帰の飛翔を準備する瞑想者の魂の姿に照応している。そこには新プラトン主義の魂の循環が読み取れるであろう。

第2章  
円環の世界観とその系譜

マニエリスム文学のなかでも17世紀イギリスの形而上詩における世界観とは、人間と地球と宇宙の照応理念にもとづく円環のイメージであった。しかしこの円環に表象された観念はマニエリスムの時代に特定されたものではない。そして円環にはどのようなイメージが託されたのであろうか。

第1節 円環に表象された世界観

円環というイメージは時代を越えて現代社会においても認められる。最も簡素でありふれたこの図像には、古代ギリシャ時代から中世ヨーロッパにかけて多様な意味が託されてきた歴史がある。

1. 円環の形而上学

シェーアバルトが小説で描いたように、車輪や指輪として表徴する円は、最も自然で完璧な図像と考えられていたため、倫理学そして美学の中に読み込まれ、プラトンからニーチェの時代に至るまで、形而上的な意味が託されてきた。

完全性を象徴するこの図像には、さらに恒常性や普遍性、永遠性や無限性という神学的な意味が託され、円環は宗教的な意味を帯びようになる。円環は神を象徴するうえで最も相応しい記号という解釈が定着していく。

そこでは神と宇宙の世界の照応関係が円環のイメージのなかに重ねられた。円環の中心である神にたいして人間がその円周に位置付けられた。円環はこうしてあらゆる信仰の根底に見いだされる普遍的な図像となっていく。

汎神論的な世界では、その観念の結び付きを示唆する空間的な図像とは円環である。円は全ての存在が完全であろうとする意思を表徴する図像として描かれるようになった。

2. 古代ギリシャにおける円環の宇宙観

古代ギリシャの哲学者プラトン (Platon 前427-前347) の『ティマイオス』では創造神デミウルゴスによる天地創造の宇宙が円で表現されている。地球は小さな円であり宇宙は大きな円である。天体の唯一の運動は円形の回転運動として秩序付けられている。プラトンの宇宙観における円の特権

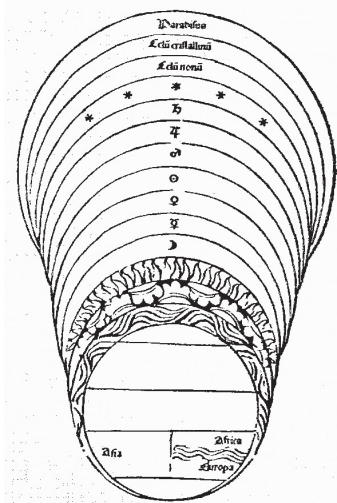


図4 新プラトン主義の天空界の位階性は、キリスト教の宇宙構造に大きな影響を及ぼした。地球はアリストテレスの四元素、火、空気、水、地により描かれている。ヨハネス・ロンペルヒ『記憶術集成』1533年

性はピュタゴラス (Pythagoras 前570-前496) の円と球の完全性と比例理論に基づいている。[図4]

アリストテレス (Aristoteles 前384-前322) は『天体論』において、球体にもとづく宇宙観を提示した。彼によると宇宙は同心円であり同心球のシステムである。全運動の中心に不動の地球があり、その周りを太陽と惑星が回転している。宇宙の全ては神の完全性に基づいており、球形をなす一つの巨大な有機体であると考えられた。[図5]

プトレマイオス (Ptolemaios 2世紀前半) は『アルマゲスト (天文学の大きな体系)』(2世紀)において幾何学的な天体運動解釈にもとづく天動説の宇宙観を提示した。この宇宙観は、以降1400年にわたり権威を保ち続けた。彼の宇宙観が崩壊するのは16世紀のコペルニクスの地動説まで俟たねばならない。[図6]

3. キリスト教における円環の階層的宇宙観

初期キリスト教の最大の思想家アウグスティヌス (Aurelius Augustinus 354-430) はキリスト教の世界観を構築するときにギリシャ哲学のプラトンの思想を援用した。そしてイタリア・ルネサンスの時代には新プラトン主義がキリスト教へと融合され世界の秩序の正しい配列が確定された。プトレマイオスとプラトンの宇宙観を基にして新プラトン主義のプロティノス (Plotinos 205頃-270頃) は、神から地上の無生物まで連続して形成する、諸存在の階層的構造として、宇宙を規定した。

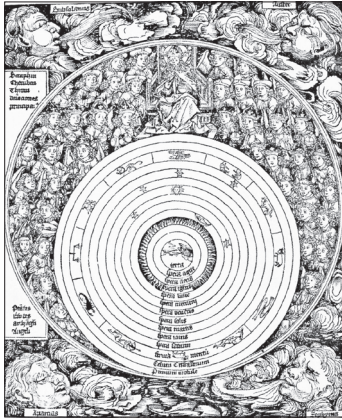


図5 宇宙は同心の天球層から構成されている。地球の四層は大地、水、空気、火からなり、その外側に七つの惑星の天球層があり、その外側を黄道十二宮が囲んでいた。第十天の外側の最高天には神や聖人が沢山いた。  
スケデル『ニュルンベルク年代記』1493年

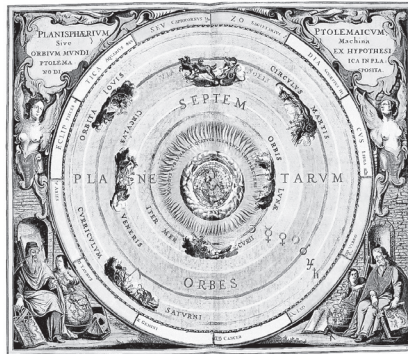


図6 プトレマイオスの宇宙体系。地上はアリストテレスにならい四元素で描かれている。火は燃えさかるようである。タウトの『アルプス建築』第28葉に酷似している。  
アンドレアス・セラリウス『宇宙の調和』1660年

宇宙は十の天圏から構成されていた。第十天は最高天であり神の世界である。第九天は水晶天、第八天は恒星天、そして第七天から順に第一天まで木星、火星、太陽、土星、金星、水星、月となる。中心には不動の地球が位置する。その地球はアリストテレスに倣って四元素から構成されている。外側から火、空気、水、地の順である。全ては同心球を成している。

さらに水晶天は天使の精霊が住む天圏として九階級に細分化されている。最上位階の熾天使から智天使、座天使までが神自身に関する所業に携わり、中間位階では主天使、力天使、能天使は宇宙の創造に関する所業に携わり、最低位階の権天使、大天使そして天使は神の個々の存在物に関する所業に携わることになっている。(注14) [図7]

## 第2節 存在の大いなる連鎖

ギリシャ時代から認められる円環に象徴された世界観とはいったどのようなものであったのであろうか。それはやがてキリスト教の世界観と融合していった。17世紀イギリスの形而上詩は、この観念の歴史の中に位置付けられる。

### 1. 宇宙の階層秩序と世界観

新プラトン主義はアリストテレスとプラトンを融合させて階層的に組織化された世界観を生み出

した。この観念に《存在の大いなる連鎖》と命名したのは、「観念の歴史」という新しい知の体系を1936年に提示したアーサー O. ラヴジョイ (Arthur O. Lovejoy 1873-1962) であった。ラヴジョイによると宇宙の構造の概念とは「宇宙には無限の階層的秩序があり、下のほぼ非存在の極めて乏しい存在物から、あらゆる階段を通って、完全を極めたものに至る鎖の環から成り立っている。その環の各々は直ぐ上のものと直ぐ下のものと、可能な限り小さい程度の相違により、隔てられているような《存在の大いなる連鎖》という宇宙観である。」この観念は、ラヴジョイによると、全ての知の領域すなわち哲学、科学、文学、芸術、宗教、政治に認められるものである。(注15) 前述した17世紀のイギリスの形而上詩とは、まさにラヴジョイが提示した《存在の大いなる連鎖》の観念が顕現した典型的な事例といえるであろう。

この《存在の大いなる連鎖》は円環の形而上学と表裏をなしていることが判る。すなわちラヴジョイのいう連鎖は直線的ではなく大宇宙と小宇宙の照応という観念からも円環的にならざるをえず、同心円という空間的な形態の表徴として顕現したからである。

### 2. ルネサンスに顕現した階層的秩序

ルネサンスの時代の宇宙観には、マルシリオ・フィツィーノ (Marsilio Ficino 1433-1499) が体系付けた新プラトン主義に基づいた〈神—天使—靈魂—性質—物質〉という階層的秩序の体系が深く影響を及ぼしている。それはキリスト教の世界観と融合していく。

またヘルメス思想の中心的思想である占星術が、ルネサンスの宇宙観へと侵潤してくる。すなわち恒星天である黄道十二宮は円球状の天空をなし、10度角(デカン)ごとに36の神的な座に分節され円環的宇宙を構成するという占星術の宇宙観である。[図8]

ウィトルウィウス (Marcus Vitruvius Pollio 前1世紀) やレオナルド・ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci 1452-1519) は均整のとれた身体像を円環の中に描きだした。それは円環に象徴された宇宙の秩序が、神と照応した地上の身体においても反映されていることを主張している。(注16) [図9・10]

### 3. 17世紀の新しい宇宙観

ルネサンスを経てヨーロッパでは科学革命の時



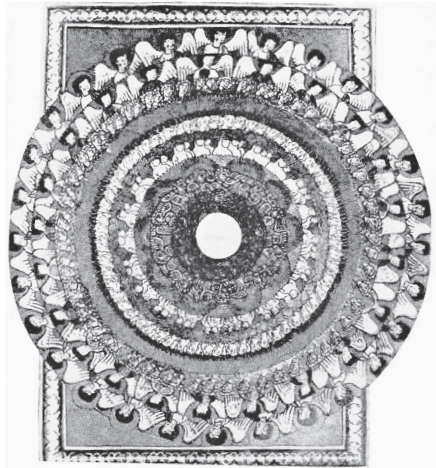


図7 天使の九階級が描かれている。中央の白い円は神の光輝を表す。『聖ヒルデガルドの日読祈祷書』の細密画、9世紀



図8 全ての惑星は獣帯に含まれており地球を取巻く。プトレマイオスの宇宙観に占星術が融合されている。木版画「世界を支えるアトラス」1559年

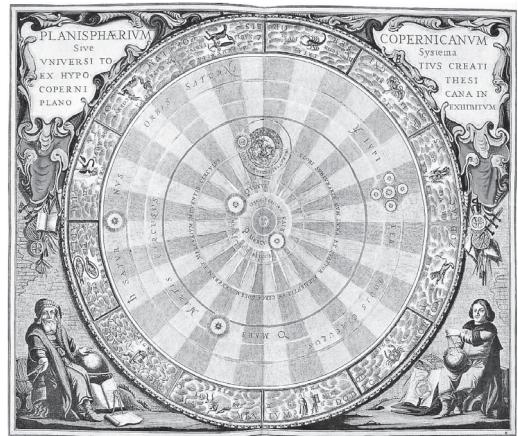


図11 コペルニクスの宇宙体系。1507年当時の暦が不正確なことを、コペルニクスは太陽を中心に世界観を描き改善できると考えた。1610年に発見された木星の四衛星が描き加えられている。アンドレアス・セラリウス『宇宙の調和』1660年

代を迎えていた。しかし魔術師はプトレマイオスの天動説を継承し、地球はまだ宇宙の中心であると考えられていた。宗教改革の時代である17世紀イギリスでは、科学はまだ自然科学ではなく自然神学であった。神の御業を自然の中に解釈するものとしてプロテスタンティズムは自然神学を是認していた。自然神学が正しいかどうかを判断するのはキリスト教であった。

科学革命の最初に登場するのは1543年に『天体の回転について』を著したコペルニクス (Nicolaus Copernicus 1473-1543) である。太陽中心宇宙説による地動説は、キリスト教の人間中心の世界観を転換させてしまった。[図11] それに続いて1597年にヨハネス・ケプラー (Johannes Kepler 1571-1630) が『宇宙の神秘』を著した。しかし彼はキリスト教の世界観を全く否定する意志はなかった。彼の提示した太陽を中心とする天動説とは、ピュタゴラス的な階層秩序と強く結び付いた宇宙観でありキリスト教を肯定するものであった。彼は神が幾何学的原理を用いてこの世界を創造したと考えていた。ケプラーはキリスト教も神の存在も信じていた。宇宙が球状であるのは、三位一体が具現化されたものとして解釈していたからである。

次に登場したガリレオ (Galileo Galilei 1564-1642) は1610年に『星界の報告』を著した。望遠鏡で見た天体運動をそのまま記述しただけであった。しかし天界に新しいものが出現することは有り得ないというカトリックの教えにガリレオの記述は抵触してしまった。彼はローマ・カトリックから

占星術師とみなされ宗教裁判にかけられた。

このガリレオの『星界の報告』に感銘を受けたのはホッブズ (Thomas Hobbes 1588-1697) であった。天体における秩序の支配する世界観を彼は国家観に読み換えたのだ。無秩序な人々を抑制するような権力構造をそこに読み取り『リヴァイアサン』(1651)を執筆した。

こうして17世紀とはデカルトに象徴されるような機械論による自然哲学が台頭してきた時代である。ところが新プラトン主義が確立した魔術的ともいえる宇宙観が否定される時代のなかでも、宗教思想家たちは神が創造した円環の世界観と階層的秩序を放棄することはなかった。

### 第3節 円環的世界観の終焉

ラヴジョイが見いだした階層的世界観という観念は、円環という形而上的図像と結び付き、中世からヨーロッパの宇宙観を象徴するものとしてコペルニクスの世界観とともに展開してきた。しかしそれはついに終焉を迎えることになった。

#### 1. 18世紀啓蒙主義前夜のイギリス

17世紀の科学革命の時代とは、そのまま円環的世界観が崩壊していく時代であったといえるであろう。イギリスでは清教徒革命から始まった混乱は1660年に王政復古をむかえ、さらに1688年の名誉革命において頂点に達する。国家は信用を失い、伝統的で因習的な学問や宗教も人々の信頼を勝ち



## 第3章

### ユートピア都市と星辰建築

イギリスでは17世紀に形而上詩人たちのもとで、円環が象徴的に文学の世界に詠いこまれた。しかしこの世紀は科学革命が始まった時代でもある。キリスト教の神の世界と科学革命は表裏をなしながら18世紀の啓蒙主義の時代へと進展していく。その過程で両者の興味深い関係はさまざまな様態として顕現する。それは文学、庭園、建築そして都市においてである。

#### 第1節 天上の世界と円環の形而上学

ルネサンスを経て構築された、地上から天上の神への階層的世界観は、プトレマイオスが提唱した天動説の宇宙観と融合され、キリスト教の聖書のなかへと読み込まれていった。その過程を天国と地獄という世界観のなかに検証する。

##### 1. 天国と地獄

天国という観念の起源は紀元前9世紀から紀元後2世紀の古代ユダヤの時代に遡る。そこで宇宙は三層すなわち地上、天国、冥界へと分けられた。そして人間の魂は死後には天国へ帰昇するという観念が生み出された。

中世までに形成された階層的宇宙観のなかで、天国は最も高く遠い所に位置付けられた。たとえばダンテの『神曲』(1321)において光に満ちた至高天は、薔薇の形をした円形劇場として描かれている。それはルネサンスの画家ジョヴァンニ・デ・パオロ (1403-1483)の《楽園の靈魂》に見て取れる。そこには二重の円環としての天国の姿が認められるであろう。[図12](注18)

ルネサンスの時代では、天国には神が住む場所とは別にエデンの園があった。しかし清教徒革命のあった17世紀から、改革派は天国からエデンの園を排除し、神中心の天国像をつくった。スコラ学派的描く天国像とは、眩いばかりに光の横溢した世界であり、賛美歌を歌いながら天国の住人たちが神の姿をみつめつつ永遠の時を過ごすところと考えられていた。(注19)[図13]

しかし18世紀末の1780年になるとイギリスでは心霊主義者エマヌエル・スウェーデンボルク (Emanuel Swedenborg 1688-1772)の『天的秘儀』

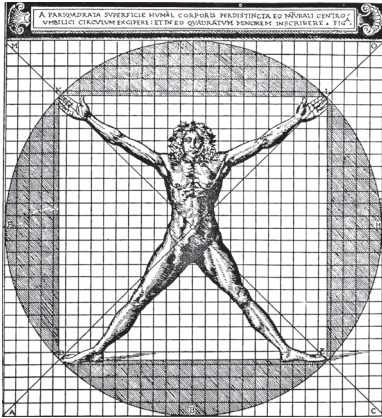


図9 大宇宙と小宇宙（人間）の神秘を明示している。  
セザリアーノ編 ウィトルウィウスの人体図

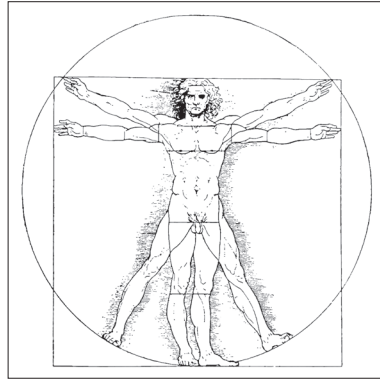


図10 レオナルド・ダ・ヴィンチは、ウィトルウィウスの建築学的規範から得た正方形と円形を結びつけている。これにより人体が万物の完全な尺度であり、原型であることを示そうとした。

得ることはできなくなっていた。実利的あるいは合理的なものだけが説得力を持つと考えられる社会へと変化していた。

それを象徴するのは、ニュートンが1687年に著した『プリンキピア（自然哲学の数学的原理）』である。それに続く『光学』(1704)とともにニュートンの自然科学は「秩序を持ち、摂理に導かれ、数学的に制御された」イデオロギーとして解釈され敷衍化されていった。名誉革命のときには「人間の私利により支配され繁栄する安定した国家モデル」として、ニュートン主義は政治的、経済的、社会的イデオロギーとなり社会に受け入れられるようになった。それと同時に神は消え去ってしまった。(注17)

##### 2. 中世の終わりの終わり

天文学の発展は中世からの占星術の存在基盤の論拠を消失させてしまっていた。新プラトン主義的なシンボリズムが衰退し、もはや魔術的な円環の世界観は社会から退けられるようになった。こうして古くから精神世界を支配してきた宇宙像は廃棄されてしまった。それどころか17世紀末には神抜きで自然を説明できると考えられる時代にすらなってしまった。均整と調和を象徴した完全な円環は天から失われた。それは中世という時代の終わりの本当の終わりを意味していた。それに代わって18世紀には啓蒙主義の時代がおとずれる。それは円環の観念を含めて中世の残滓を余すことなく一掃してしまった。

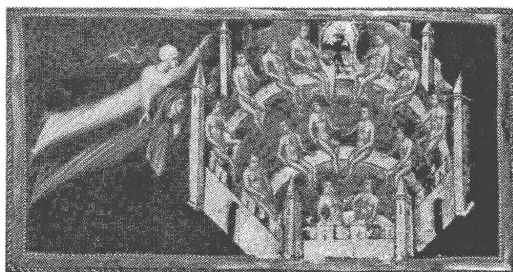


図12 ダンテ『神曲』の「天国篇」にパオロが描いた挿し絵では、ダンテの座所をベンチに変え、神に召された人々は円形劇場の石のベンチに腰掛けてくつろいでいる。《楽園の靈魂》ジョヴァンニ・ディ・パオロ、1438-1444年頃

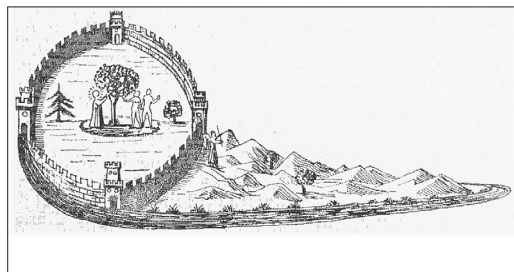


図13 「地上の楽園」は天上の世界にあった「エデンの園」として円環状に描かれた。《地上の楽園》フラ・マウロ、15世紀

(1756)と『天国と地獄』(1758)が英訳され注目されるようになり、天国観が大きく変容した。彼によると天国とは、地上の世界と連続しており、死後も魂は天国の都市で忙しく暮らしているというのだ。こうしてスウェーデンボルクにより天国は世俗化され、禁欲的な神中心の天国観は否定された。(注20)

## 2. エデンの園

清教徒革命以前の時代では、天国には神がいる光の領域と、それとは別にエデンの園があった。前者は形而上的な天国で、聖人や天使や使徒たちがおり、神を黙想していた。後者は黄金の壁に囲われて草木に被われ、鳥や動物とともにアダムとイヴが暮らす楽園であった。[図14]

楽園を意味するパラダイスは古代ペルシア語 pairidaeza を出自とし、本来「円形の塀を巡らした囲い地」を意味するもので、王室の公園に対して用いられた。閉ざされた庭のイメージは聖書の「秘密を封じ込める秘密の場所」として解釈されるようになった。それまでの単なる草木はキリスト教信仰のイコノロジーとして徳や神学的意味と結び付けられ、薔薇や百合が描かれた。(注21)

キリスト教では楽園が天国のイメージと結び付けられた。それは薔薇の聖母のイメージに集約されている。聖母子が薔薇に囲まれた中で天使の奏でる音楽を聞いているという構図は、旧約聖書の雅歌のイメージを強く反映している。すなわち「わたしの妹、花嫁は、閉ざされた園。閉ざされた園、封じられた泉」としてエデンの園のイメージが構築されていった。(注22)[図15]

神が住む天国とエデンの園とは対比的に描かれてきた。ヨハネの黙示録には神の住む都市である天上のエルサレムに関する記述がある。それによ

ると「都は方形をしていて、その長さは幅と同じであった」と記されている。(注23)[図16]

それに対してエデンの園は宇宙の円環に照応しており、楽園は天の影として円環をなす。ミルトンの『失楽園』では「ついに私を導いて木の茂る山に登らせた。その頂きは平坦で、広い円形をなし、囲われ、美事な木々が植えられ……」と楽園が円形として描かれている。(注24)

## 第2節 形而上詩人の庭園

エデンの園は天上の円環の世界に照応するものとして円形に描かれた。それは新プラトン主義において地上は天上の影としたアイデアの観念に応じたものといえるであろう。興味深いのは円環の形而上詩を詠った詩人のなかに庭園と係わった人たちがいたことである。

### 1. マーヴェルの庭

理想の世界をアンドリュー・マーヴェルは庭園に見出したようである。彼は1650年から1652年末までの間、トマス・フェアファックス卿の屋敷アップルトン邸に滞在していた。(注25)この時期にマーヴェルは「庭」という詩を書いている。ここからも大宇宙と小宇宙の照応に基づいた円環の形而上的な表現を読み取ることができる。この九連からなる詩では天上界の暗喩として、緑によるエデンの園が至福の空間として描かれている。それは天上のアイデア界が地上に直接投影された世界であり、そこには明らかにフェアファックス卿が傾倒していた新プラトン主義やヘルメス思想からの影響が認められる。七連では魂が天に向かって飛翔しようとする瞑想者の恍惚の様子が詠われて





図14 裸体のアダムとイヴがゴシックの門から入ってくる。二人の前には生命の樹と知恵の樹がある。中央にある泉から四つの川が、園を囲む壁に穿たれた四つの口から勢いよく流れ出ている。園内には鳥が舞い動物が歩き草花が咲く。  
ザクセンの神学者ルドルファス『キリストの生涯』の挿し絵、1472年



図15 聖母マリアの処女性を象徴するような「閉ざされた庭」のなかに描かれた薔薇園は「エデンの園」のイメージを継承している。  
《薔薇垣の聖母》シュテファーン・ロッホナー、1440年頃

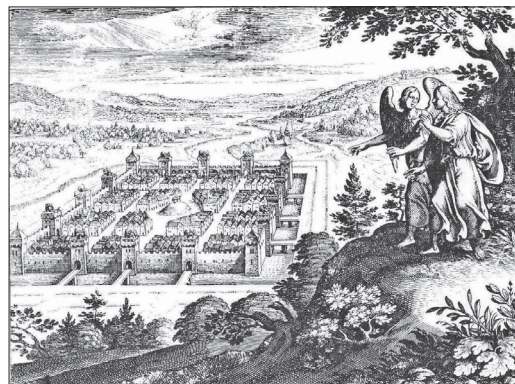


図16 天上のエルサレムは方形の高い城壁に囲まれ、12の門があり12人の天使が警護している。そしてイスラエルの12の部族の名前が刻まれている。  
『哲学者の薔薇園』の挿し絵、Iconum Biblicarum, Strasbourg, 1630

いる。マーヴェルの詩は全編が天上からの光と地上へのその反映という構図で構成されているのが特徴的だ。(注26)

## 2. ジョン・ダンの庭

イギリスの形而上詩人を代表とするジョン・ダンが当時もっとも親しくしていたといわれる人物の一人にベッドフォード伯爵夫人ルーシー・ハリントンがいた。彼女は1603年から1620年までロンドンの宮廷でもっとも影響力があった女性の一人といわれ、特に詩人などの文人サークルの中心的な存在であったようだ。そのサークルの仲間ジョン・ダンがいた。興味深いことはルーシーの邸宅の庭の造成にジョン・ダンが係わったといわれていることである。ルーシーはハンプトンコートの北側のトゥイクナム庭園を1607年から1617年にわたり所有していた。ダンは詩「トゥイクナム庭園」を残している。

1609年にこのトゥイクナム庭園を訪れたロバート・スミッソンの記録が残されている。それによると庭園は321フィートの正方形で、周囲は壁で囲まれている。内部には四重の同心円状の生け垣がある。一番外側は山査子、2番目はトピアリ、3番目はローズマリーであり四番目は果樹で構成されている。入口は四方にあり、中央には円形区

画がある。それは三重の同心円状の植栽で構成されている。外側が果樹、二番目がライムそして三番目が樺の樹である。そして四隅には築山があったという。[図17]

このトゥイクナム庭園には、コペルニクス以前の、地球が中心であった頃の天動説のプトレマイオスの宇宙観が体现されていた。[図18] 中央の円は地球であり、その外側に月、水星そして金星の軌道が植栽で表現されている。金星は樺の樹となる。さらにその外側を太陽、火星そして木星の軌道が果樹で表現され、その外側に木星の軌道としての生け垣がある。ジョン・ダンはここをエデンの園とするために詩「トゥイクナム庭園」のなかで蛇を登場させてさえている。(注27)

これを彷彿とさせるような庭園がオックスフォードに残されている。それはウォルター・ジョーンズが1614年に造営したチャスルトン・ハウスの庭園である。庭園は中央の日時計の周囲を薔薇の花壇が取り巻き、その外側には珍妙な24本の植物が円環状に並んでいた。(注28) [図19]

ルドルフ II 世の時代にも天界構造をもつ庭園がブラハにあったという記録が残されている。樹木が星の姿に植えられており、そのなかに6つの角のある星の形をした小さな美しい家が建っていたといわれている。

こうした宇宙に照応した円環状の庭園には、マニエリスム芸術の特徴がよく反映されているといえるであろう。すなわち神の創造を模倣したのがマニエリストであるからだ。彼らは虚構の庭園を数多く造っている。偽の山、偽の川、偽の自然による偽の庭園である。マニエリスムの庭園は宇宙

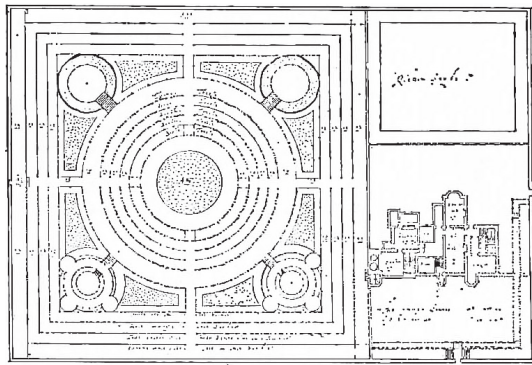


図17 トウイクナムにあったベッドフォード伯爵夫人の庭園平面図。邸館に比べても規模の大きさが特異である。コペルニクス以前の宇宙観にもとづいた円環状の同心円階層構造が、正方形の四重の生け垣の中に造られている。四隅には築山があり階段で登ることができる。1609年頃

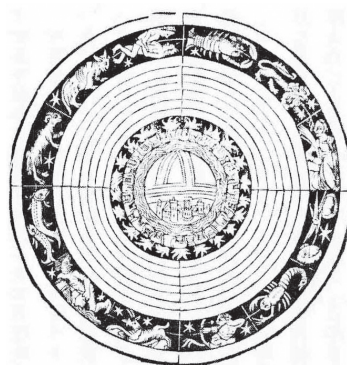


図18 コペルニクス以前の宇宙観。地球が中心にあり、その周囲に諸惑星の天球が囲んでいる。一番外側に恒久天があり星座が描かれている。

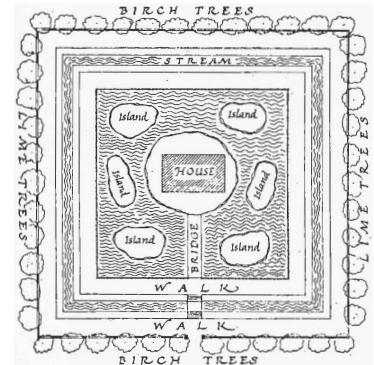


図20 フランシス・ベーコンのゴランベリーの庭園図。正方形の二重の土手に囲まれて、泉水の中央の浮き島に邸宅が建てられている。1608年

のアレゴリーとして精巧に表現された。現実からは限りなく隔絶された観念の世界を、内省的な囲われた庭へと逃避し、神に代わって創造したのである。(注29)

### 3. ベーコンの庭

フランシス・ベーコン (Francis Bacon 1561-1626) は経験論による科学的認識論を先駆した人物として知られている。彼は「庭について」という随想を残している。(注30) 実は彼は1594年にトウイクナム庭園を21年契約で借りていた。しかし12年後の1607年に、ベッドフォード伯爵夫人ルーシー・ハリントンに譲り渡している。

ベーコンはその後、イングランド国璽尚書であった父のニコラス・ベーコン (1510-1579) が所有していたゴランベリーの邸館へと移る。そこで彼は1608年7月にその邸館の庭園の草案を作成している。その庭園については1656年にそこを訪問したジョン・オーブリーの記録が残されている。ゴランベリーの庭園では正方形の湖の外周に樺とライムの並木が植えられ、幅25フィートの歩道が周囲を巡っている。そして同心円状に、内側には水路が一周し、そして土手が一周し、その内側に水路が一周している。湖上には六つの島々があり、中央の大きな島には橋が架けられている。中央の島は幅100フィートであり、そこにはギャラリーがあるというものである。(注31) [図20]

興味深いのはその中央の湖に浮かぶ島の上に建てられた自邸である。その建物のなかにも回廊が設けられており、その回廊には庭にむかっていく

つもの窓が設けられていたからである。その窓には動植物の絵が描かれていた。これはコメニウス (Johannes Amos Comenius 1592-1670) の汎智学を彷彿とさせる。なぜならばベーコンは『学問の進歩』(1605) のなかで技術学芸において記憶術の重要性を指摘しているからである。(注32)

## 第3節 植物園と占星術

17世紀の形而上詩の世界における円環の観念は、詩人が描いた庭園の中に顕現していた。しかしこの庭園では大宇宙と小宇宙の照応が明瞭には読み取れなかった。このためイギリスばかりでなく、当時の大陸の諸都市で造られた植物園について検証する。

### 1. 星辰と植物

イギリスの形而上詩人ヘンリー・ヴォーンの詩「朝の目覚め」では魂の霊的再生を朝の目覚めとして喩えている。魂の復活の喜びは、植物のように芽を吹き開花し再生するイメージで語られている。ここでは地上の植物と天空の星辰が共感するという観念が認められるであろう。(注33)

人間と宇宙の統合を最初に謳ったのはヘルメス思想であった。星辰の運動は地上と結び付けられており、地上の鉱物や植物そして身体に対して影響を与えていると考えられた。(注34)

16世紀に入り植物と星辰との関係を体系的に語ったのはパラケルスス (Paracelsus 1493-1541) で



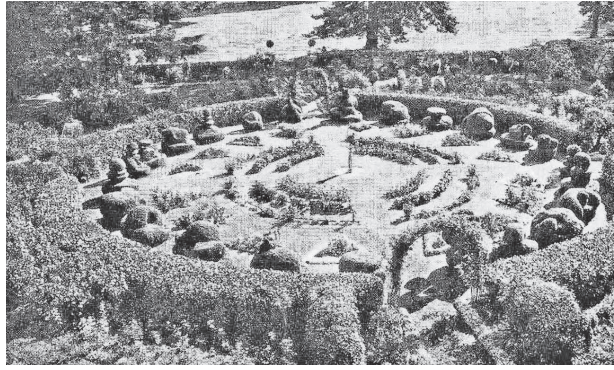


図19 チャスルトン・ハウスの庭園。もともと1602年から1614年にかけて造られた。この写真は1828年に復元されたものである。円環の観念を読み取ることができる。

ある。このスイス生まれの医者は大宇宙と小宇宙の照応を唱え、それまでの〈神－人間〉というキリスト教の世界観に自然を取り込み〈神－自然－人間〉という新しい観念の連鎖を構築した。パラケルススによると天上の星辰と地上の自然は初め一つのものであった。それを神が分離したと考えた。しかし両者の照応関係は残された。すなわちそれぞれの植物は地上の星であり、それぞれの星は浄化された植物なのである。(注35)

ジャンバッティスタ・デッラ・ポルタの『自然魔術』(1558)では星辰の及ぼす流出物が地上の自然に影響を与えるという考えのもとで、ある種の植物と恒星や惑星そして月との関係が指摘されている。この本は1658年には英訳された。(注36)地上の植物は特定の天体の動きや月齢の変化など星辰の影響を強く受けている。薬草は決まった惑星の支配下にあり、採取や調剤の時期が決まっていた。パラケルススが理論化して体系化した植物占星術はこうして医療や製薬と結び付いた。(注37)

## 2. 植物園と占星術

ジョバン・バッティスタ・フェラーリ (1583-1655) の『花々の栽培』(1633)では、夜空に輝く星々を花に喩え「地上の庭園は天空の都市を表象するため正方形の庭園となる」として、天空の都市にならった幾何学構成の花壇に夜空の星々として花々を植えた。さらに彼は、庭師には星辰の知識が必要であると主張した。月の満ち欠けは植物の生長に大きな影響を及ぼすからだ。月齢と黄道十二宮の位置で植物の生長は異なる。(注38)

花壇は天と地の咬合として、天の穹窿を象徴する円と、新エルサレムを象徴する方形により構成された。こうして造られた庭園の典型は植物園に認められる。例えば16世紀から17世紀にかけて多くの植物園や薬草園が造られた。その中心はイギリス、イタリア、スペイン、ウィーンやフランスであった。植物園とは聖書のあらゆる植物種を収集し、神に代わって失われたエデンの園を地上に復元する試みでもあった。植物学者は占星術師でもあり神学者なのである。イタリアでは1543年にピサ植物園、1545年にパドヴァ植物園とフィレンツェ植物園、1558年にパヴィア植物園、1563年にボローニャ植物園、1600年にマントヴァ植物園が造られた。またイギリスでは1621年にオックスフォード植物園、1673年にチェルシー植物園、1680年にエディンバラ植物園、1759年にキュー植物園、1762年にケンブリッジ植物園が造られている。(注39)

パドヴァ植物園はジローラモ・ポッロの設計であるが、それは円形と方形が同心円状に構成されたもので、プトレマイオスの宇宙観を読み取ることができる。星辰あるいは占星術の黄道十二宮と植物の関係が反映されている。[図21・22] またマントヴァ植物園はゼノービオ・ボッキの設計によるものであるが、同様に円形と方形を組み合わせる占星術の宇宙観を象徴させた平面構成となっている。[図23] (注40) こうした植物園の構成は、たとえばプラトンの占星術の図像 [図24] やジョルダーノ・ブルーノ (Giordano Bruno 1548-1600) の『イメージの組み合わせについて』(1591)の中の図像 [図25] と比較することにより両者の構造がよく似ていることが判るであろう。前者は黄道十二宮のホロスコープの図像であり後者は記憶術に関する図像である。

植物園では収集した植物に命名し、分類し、整理する作業を植物学者がおこなっていた。この分類にしたがって花壇に植栽した。このため植物園は区画分けする必要があった。その手法として天界を象徴する円と方形を用いて花壇を構成していたのである。

植物園とは植物の栽培と管理の実務の場でありながらも、庭園の空間構造とは、膨大な情報が整理された百科全書的なシステムそのものであった。

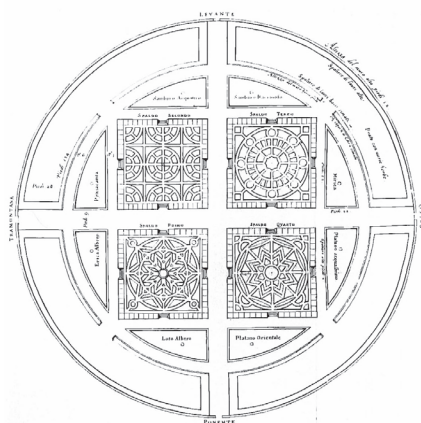


図21 バドゥヴァ植物園平面図  
設計 ジョーラモ・ボッロ、1545年  
ジョーラモ・ボッロ『バドゥヴァの植物園』1591年

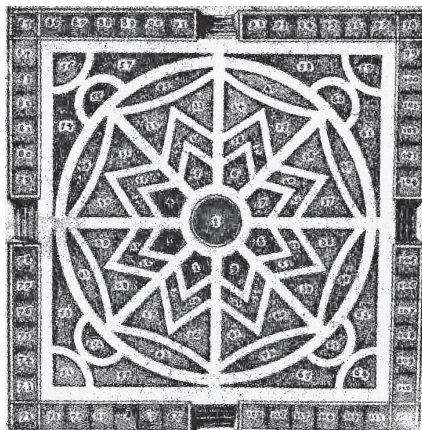


図22 バドゥヴァ植物園の第四クォーター部分平面図。各区画に番号が打たれ分類されている。星型の形状が特異である。

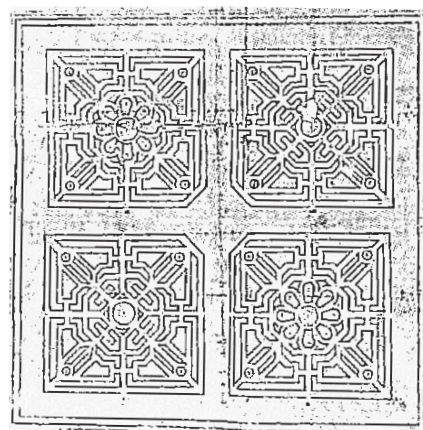


図23 マントヴァ植物園平面図  
設計 ゼノービオ・ボッキ、1603年

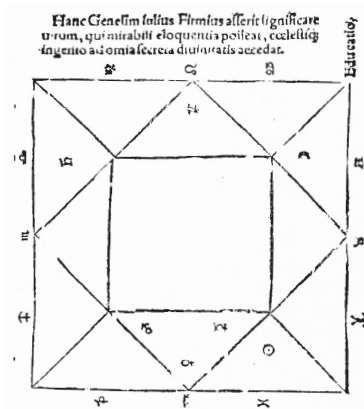


図24 プラトンのホロスコープ  
伝統的な占星術の幾何学構成は植物園の構成と類似している。

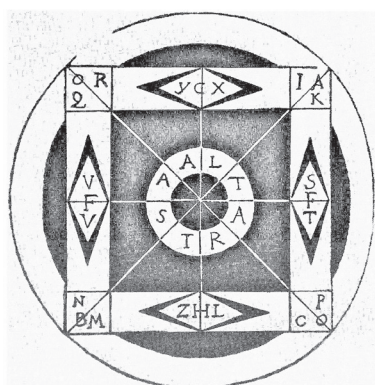


図25 天界の象徴である球形と、物質世界の象徴である正方形から、記憶のための24の部屋が構成されている。これは記憶の円形術と方形術を先取りしている。ジョルダノ・ブルーノ『イメージ、シグナム、イデアの構成について』1591年

## 第4節 世界劇場と占星術

イタリアの植物園における空間構成には天界との照応が認められた。しかしさらに中世に生まれた記憶術という知の体系が植物園に重ね合わされて、マニエリスム時代の複合的な知の体系としての庭園が形成された。それは建築の空間にも認められる。特に同時代のイギリスにおける円形劇場を取り上げ比較検討をおこなう。

### 1. 記憶術と建築

古代ギリシャのシモニデスが発明したといわれている記憶術はその後キケロの『弁論家について』やクインティリアヌス『弁論術教程』により理論化された。修辞学の一理論としてその後中世を通じて継承された。

ルネサンスの時代に記憶術を積極的に取り入れたのはドミニコ会修道士たちであった。特にドイツのヨハネス・ロンベルヒの『記憶術集成』はよく知られている。

ではなぜドミニコ修道会なのであろうか。その理由は修道士ドミニクスが1216年に設立したこの修道会とは説教派と呼ばれているように、修道士が説教の順序を知るために記憶術を導入していたからなのである。(注41)

記憶術は哲学的な瞑想を含めた知の連環における宗教的技術の一つであり、ドミニコ会修道院を中心として発展していった。そして中世に12世紀ルネサンスといわれるイスラム文化をヨーロッパが導入したときに、錬金術や占星術を積極的に吸収したのもドミニコ会修道院であった。こうして記憶術は占星術や錬金術と融合していったと考えられている。(注42)

ヴェネツィアのドミニコ会修道士コジモ・ロッセリ『記憶術宝典』(1579)はダンテの天国と地獄を記憶術により解釈した興味深い図像を提示している。地獄では11に区分された記憶のシステムとして異教徒やユダヤ教徒が分類されている。[図26] また天国では中央にキリストの座を設け、その下に十二使徒や予言者あるいは殉教者そして聖女たちが分類されている。[図27] 両者に共通していることは、その記憶の区画が同心円の円環として構成されていることである。天国や地獄の美德や悪徳を記憶するうえで用いたこの構造は、さらに過大な情報や知識を整理分類し記憶するために、占星術における天界の円環と階層的な序列のシステムを援用するようになった。それはロッセリの「四元素の記憶のロクス」[図28]や「天界



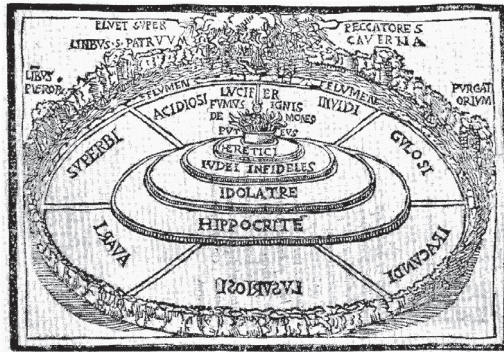


図26 地獄の記憶ロクス  
コジモ・ロッセッリ『人工記憶の宝庫』1579年

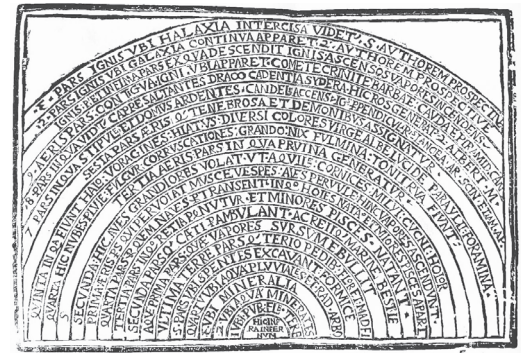


図28 四元素の記憶ロクス  
コジモ・ロッセッリ『人工記憶の宝庫』1579年

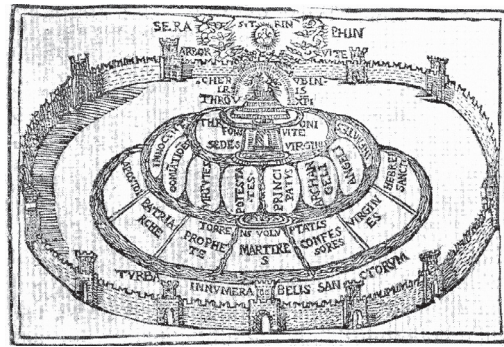


図27 天国の記憶ロクス  
コジモ・ロッセッリ『人工記憶の宝庫』1579年

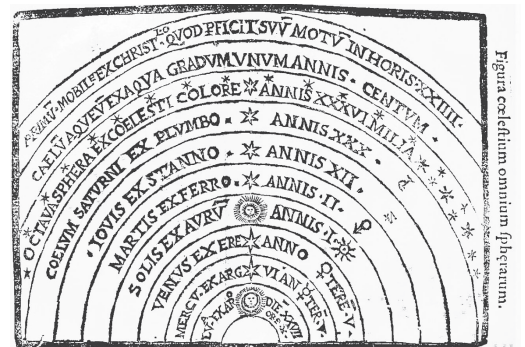


図29 天界の記憶ロクス  
コジモ・ロッセッリ『人工記憶の宝庫』1579年

の記憶のロクス」[図29]においてプトレマイオスの天体系を援用した同心円状の世界として記憶の場が描かれていることでも理解できるであろう。そして円形と方形による天界の体系は建築に対しても反映された。知を整理分類して俯瞰するために、庭園や建築は都市とならんでもっとも相応しい空間構造を具体的に提示してくれていたのである。(注43)

## 2. ウィトルウィウスと劇場建築

紀元前1世紀にアウグストゥス帝に仕えた建築家ウィトルウィウス (Marcus Vitruvius Pollio) の『建築十書』はルネサンスにおいて1511年に初めてラテン語に翻訳され、1521年にイタリア語翻訳された。それは新プラトン主義のなかで再評価され大きな影響を及ぼした。この『建築十書』は建築のオーダーの解説書ではない。建築を自然哲学、占星術、天文学、数学、音楽のなかで解釈し、百科全書的な知識の円環のなかに、あらゆる学問領域へと知を統合する中心的存在として建築を位置付けている。(注44)

ウィトルウィウスは『建築十書』の第五書のなかで、劇場建築を取り上げている。そこでは占星術の黄道十二宮を用いた劇場空間の構成を説明している。第五書第6章では「劇場そのものの形は

次のように造られるべきであり：底面の周に予定されている大きさの円周線がコンパスの一脚を中心に置いて引かれ、その中に円の縁に触れる四つの等辺三角形が等間隔に描かれる—これによってまた天空十二座の星学における音楽から借りた諸星の関係が割りつけられる」(注45)と述べられている。劇場という建築は占星術をもとにして調和的な円形として基本的な枠組が構築され、細部において7つの広間と5つの舞台入口へと区分されている。[図30]

## 3. エリザベス朝の円形劇場と記憶術

劇場建築はウィトルウィウスにより占星術へと、一方で記憶術という修辞学の空間的なシステムへと結び付けられ、ルネサンスの新プラトニズムのなかに受容された。記憶術は二つの方法としてルネサンスの時代に整理された。一つは円形術である。黄道十二宮による占星術として天界の円環の構造にならっている。もう一つは方形術である。これは物質的なイメージを使用する記憶術で、建築や部屋を用いることからいわれたようだ。劇場建築はこうした円形術と方形術を統合したものと解釈できる。方形の建築は天界の円環状の世界を反映して円形の劇場となる。この劇場は記憶術と占星術を表象した観念的建築なのである。(注46)

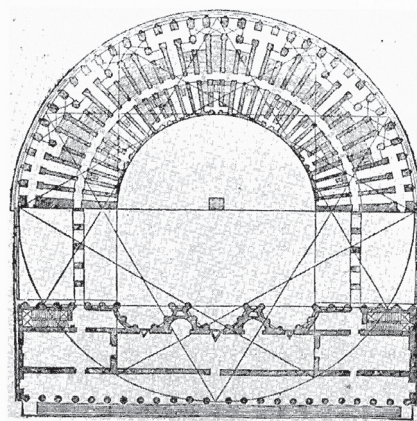


図30 パッラーディオの再構成によるローマ劇場の獣帯的構成法。  
ウィトルウィウス『建築十書』ヴェネツィア、1566年

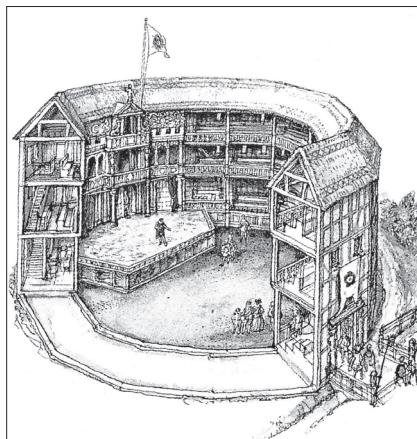


図31 円形劇場 薔薇座の復元図

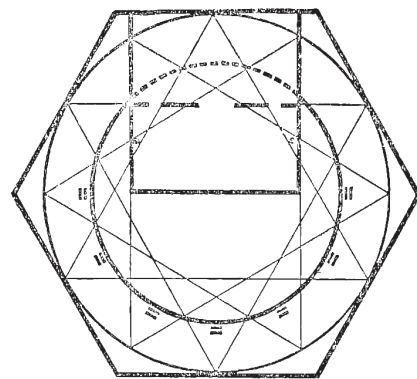


図33 地球座の平面図試案  
フランセス・イエイツ『世界劇場』1969年

劇場建築に託された記憶術の観念は、イギリスのエリザベス朝の円形劇場のなかに見いだせるかもしれない。なぜならばイギリスのエリザベス朝の社会では記憶術や占星術や新プラトン主義そしてヘルメス主義そしてカバラなどオカルト哲学が支配し、多数の神秘家や魔術師が跋扈していたからである。例えばジョン・ディー（John Dee 1527-1608）は『ユークリッド幾何学言論』（1570）の序文を執筆したが、その「数学的序文」のなかでウィトルウィウスの『建築十書』をイギリスに初めて詳細に紹介している。（注47）あるいはドミニコ会修道士であるジョルダーノ・ブルーノ（Giordano Bruno 1548-1600）がいた。彼は1582年に二冊の記憶術に関する本をパリで出版している。『イデアの影について』と『キルケーの呪文』である。その翌年にブルーノはイギリスへ渡った。彼のヘルメス主義思想はエリザベス朝に決定的な影響を与えた。（注48）ジョン・ディーのヘルメス思想を継承したのはロバート・フラッド（Robert Fludd 1574-1637）である。彼が著した『両宇宙誌』（1617, 1619）は大宇宙と小宇宙の照応について語っている。フラッドにとってのウィトルウィウスは音楽の共鳴器であった。（注49）

#### 4. 世界劇場としてのグローブ座

イギリスでは1558年から1642年の期間はエリザベス朝演劇の時代といわれている。そしてこの時代だけ特異な円形劇場が次々とロンドンに建設された。1576年に最初の円形劇場シアター座とカーテン座がロンドンに建設された。続いて1587年薔薇座、1595年白鳥座、1599年地球（グローブ）座、1600年幸運座、赤牡座そして1614年希望座が建設

された。しかし清教徒革命ののちに突然1642年全ての劇場が閉鎖された。（注50）[図31]

この時代の代表的な戯曲家のシェイクスピア（William Shakespeare 1564-1616）が芝居を書いたのは1586年から1610年の頃である。そして彼が拠点としたのがグローブ座であった。1599年のこのころ落としを、シェイクスピアの『お気に召すまま』で開演したグローブ座の入口には、「全世界が劇を演じる」というヘラクレスの文字が掲げられていた。劇場と役者は世界の縮図。この世はすべて舞台である。円形の桟敷席は天界を意味しており、そこから世界の縮図である舞台を見下ろしていた。神が観客であり、人間は神に操られて芝居を演じる。シェイクスピアが『お気に召すまま』でいっているように「世界は劇場、人は役者」であり世界全体が一つの舞台という意味で、グローブ座はテアトル・ムンディすなわち世界劇場そのものであった。（注51）[図32]

ここで問題となるのは、果たしてロンドンで建設された円形劇場が、ウィトルウィウスのローマ劇場を継承し、そこにジョルダーノ・ブルーノの記憶術やロバート・フラッドの新プラトニズムの理念を読み取ることができるのかどうかということである。状況証拠を揃えてフランセス・イエイツは確信をもって語っている。しかしその十分条件は満たされていない。

たしかに既往の調査研究からは、グローブ座の舞台の天井には黄道十二宮の星辰が描かれて「天」と呼ばれ、それに対して舞台の奈落は「地獄」と呼ばれていたことが判っている。その「天」と「地獄」の峽に舞台はあり、そこで世界が演じられているという意味では、劇場全体の空間には





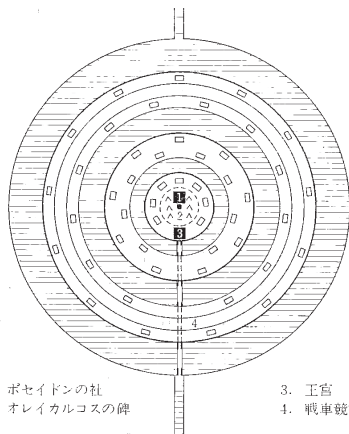


図34 アトランティスの街の中央部分。  
同心円状の都市構造が特徴的である。  
プラトン『クリティアス』紀元前4世紀

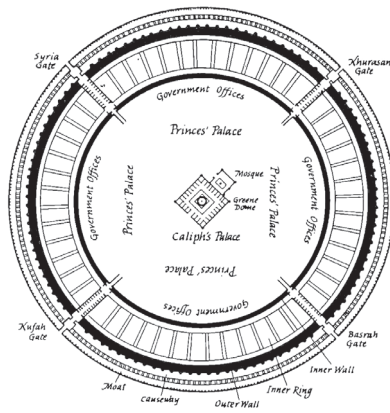


図35 バグダード  
太陽をモチーフとした完全な円形都市。  
776年

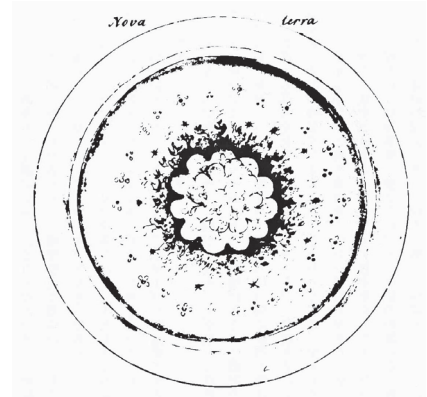


図36 回復された楽園としての新しい大地。  
12世紀

チテーラの島にある円環の都市が描かれている。同心円状に生け垣で壁が構成された円形の島の円環状の都市の中心部には、円形劇場が建てられていた。[図38]

1552年にドーニ (Anton Francesco Doni 1513-1574) がヴェネツィアで著した『賢明と狂気の世界』には円環の理想都市が登場してくる。中央にある「学智の寺院」から放射状に都市が構成されている。[図39]

1599年にハインリヒ・シックハルト (Heinrich Schickhardt 1558-1635) によりヴェルテンベルクのフィリードリヒ I 世のために黒い森の中に実際に建設された都市がフロイデンシュタットである。この方形の都市では、同心円状に城壁と街区が五重に囲み、中央の正方形の広場には斜めに砦が建てられている。この都市では反カトリックのためにプロテスタントとカルヴィニストとユグノーの統合が目論まれていた。[図40]

1609年にデル・ベネ (Bartolomeo Del Bene) がパリで発表したユートピア都市はもともと1565年に描かれたものだ。人間の五感を象徴する五本の回廊が中央の宮殿から延びている。伝統的な記憶の劇場を踏襲している。[図41]

1849年にバッキンガム (James Silk Buckingham 1786-1855) が『国家悪と実践的救済』で発表した一万人のためのユートピア都市である。ヴィクトリア朝の時代に資本主義の修正と共同体社会制度を提案した。その都市空間は放射状の道路と同心円状の街区が特徴的である。[図42]

## 2. カンパネッラ『太陽の都』(1602)

17世紀ユートピア都市のなかでも特筆に値する

のはドミニコ会修士トンマーズ・カンパネッラ (Tommaso Campanella 1568-1639) が1602年に獄中で執筆し1623年にドイツで出版した『太陽の都』であろう。彼はガリレオを支持したことで有名であるが、そのため異端尋問を受け、1599年から1626年まで獄中生活を余儀なくされた。

スリランカ島を想定したタブロバーナ島に建設された理想の共和国『太陽の都』は直径22マイルの円環都市である。中央の神殿を中心として同心円状に七つの城壁が取り囲んでいる。この城壁にはそれぞれ惑星の名がつけられている。

このユートピア都市は一人の神官君主が治めており「太陽」と呼ばれた。都市中央の神殿は完全な円形であり、祭壇には大きな天球儀と地球儀が置かれている。円天井には天界の全ての星座と、天極や子午線や緯度線が描かれている。また七つの惑星の名を持つ七つの灯明が天井から吊されている。(注54)

## 3. アンドレーエ『クリスティアノポリス』(1619)

薔薇十字運動の中心的人物であるヨーハン・ヴァレンティン・アンドレーエ (Johann Valentin Andreae 1586-1654) が1616年に著した『化学の結婚』は、錬金術を象徴的に扱った著作として有名である。アンドレーエはルター派正統主義神学の総本山であるテュービンゲン神学校で学んだルター派の牧師である。(注55) [図43]

アンドレーエが1619年に著した『クリスティアノポリス』はカパルサラマ島に想定されている。このユートピア都市は一辺210メートルの正方形であり、四隅に稜堡がある城壁で囲まれている。内部では四重の街区が中央広場を同心円状に囲ん



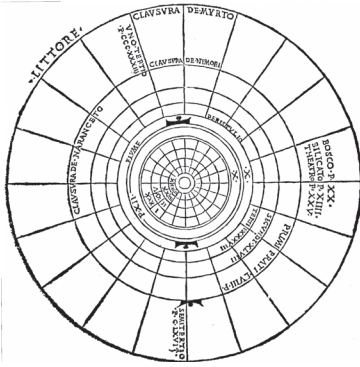


図38 理想の島チテラ島の円形理想都市。  
フランチェスコ・コロンナ  
『ポリフィロスの狂恋夢』1499年

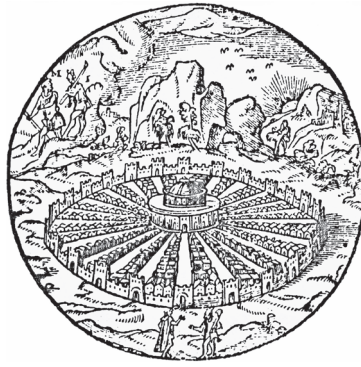


図39 「学智の寺院」から放射状に構成された理想都市。  
アントン・フランセスコ・ドーニ  
『賢明と狂気の世界』1552年

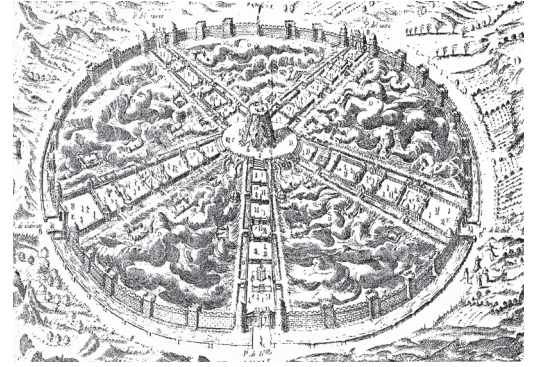


図41 人間の五感が放射状の回廊で表現された理想都市。  
バルトロメオ・デル・ベネ、1609年

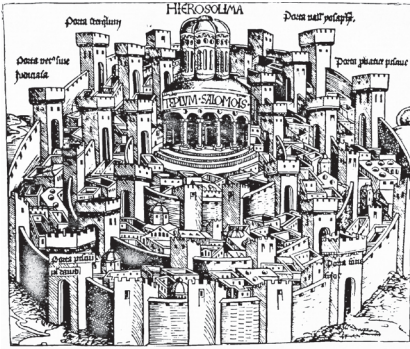


図37 エルサレムの想像都市。  
ハルトマン・シェーデル『世界の記録』  
1493年

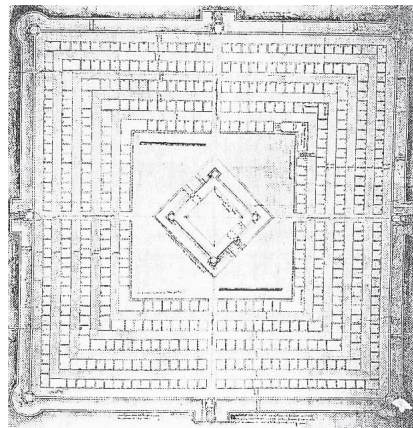


図40 フロイデンシュタット  
設計ハインリヒ・シックハルト、1599年

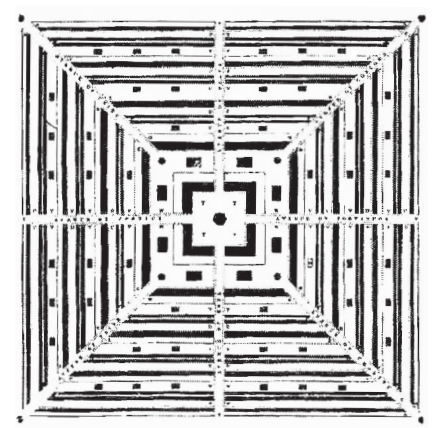


図42 理想都市ヴィクトリア  
ジェームス・シルク・バッキンガム  
『国家悪と実践的救済』1849年

でいる。その広場の中央には円形のソロモン神殿が建つ。神殿は天使の階位に応じた構成となっている。これは太陽神に基づく、神の臨在の光が宿る都市として考えられている。(注56) [図44]

#### 4. ユートピア都市と記憶術

中世からのユートピア都市において顕著なことは円環の都市形態である。しかし17世紀のユートピア都市に共通して興味深いことは同心円状の階層状の空間構造が記憶術と深く関連していることである。

『太陽の都』の都市の居住区を取り囲む同心円状の壁には、絵が描かれていた。一番内側の壁の両面には数学的図形と世界地図、二番目の壁には鉱物と湖沼や河海、三番目の壁には植物と魚、四番目の壁には鳥類と爬虫類、五番目の壁には一般的動物そして一番外側の壁には技術と学芸と法律である。(注57)

『クリスティアノポリス』においても同様のことが指摘されている。城壁は「世界の運動を表象する絵画で全体が装飾されていたのである。そして市内の随所には著名な人物の肖像画や彫像が設置されていた。中央の神殿には自然史と天空の図像が描かれていた。

両者のユートピア都市には百科全書的な知識が、円環状で階層的な都市構造の空間秩序を利用して、記憶と学習のために配置されていたことが確認できる。森羅万象、人間の活動の世界が分類され天界の円環の構造に対比されて体系的に描かれていた。ここでは記憶術が都市空間と照応している。

都市は記憶と教育のための理想の場として構想されたものであるといえるであろう。理想的なユートピア都市とは、その目的として空間の秩序により、人々を教育し改良していくことにある。記憶術はユートピア都市の知の秩序の空間として受容され、人々はこの百科全書的な図像のなかで生

活することになる。人々の記憶のイメージは誘発され、理想都市の住民として不可欠な倫理と道德の教育がおこなわれる空間装置として、都市は円環状に階層的に構築されている。(注58)

では実際にはどのように壁に絵が描かれていたのであろうか。それは1679年にアムステルダムで出版されたキルヒャー（Athanasius Kircher 1602-1680）の『バベルの塔』のなかに掲載された「セミラミスの城」が興味深い。その城を三重に取り囲んでいる城壁にはセミラミスとニミナスの愛の歴史が描かれているのが判る。[図45]

5. コメニウスと汎智学

17世紀マニエリスムの植物園やエリザベス朝の劇場建築において円環や階層的な空間構造と記憶術との関係を検証してきたが、それは17世紀のユートピア都市においても通底していることが判明した。とくにカンパネッラの『太陽の都』においては知識を整理分類するばかりでなく教育のシステムとしての側面が、コメニウスの汎智学に多大な影響を与えたとされている。すなわち後にコメニウスが発表した『世界図絵』(1658)を彷彿とさせているからである。

ヨハネス・アモス・コメニウス（Johannes Amos Commenius 1592-1670）は本名をコメンスキー（Jan Amos Komenský）という。チェコ兄弟団の主席監督を務めた人物である。この兄弟団は民衆の教育を重視していた。ここでコメニウスの教育哲学である汎智学（Pansophia）という普遍的な知の体系が構築された。このため彼は近代教育の祖と言われている。彼の師 J. H. アルシュテットは7巻の百科全書を出版している汎智学の中心的人物であった。彼は宇宙の真の啓示とは完全無欠の体系化された思维能力が不可欠であるとして、普遍的な教育の必要性から汎智学を提唱した。この図像から簡単に記憶をすることにより効果的な学習をおこなえるという教育学の規範を示した。こうした意味でコメニウスの教育哲学には新プラトン主義における、世界と精神の照応が認められるであろう。

コメニウスはその後イギリス議会から招聘され、多大な影響をイギリスに与えた。1641年にはイギリスのユートピア主義者サミュエル・ハートリブ（Samuel Hartlib 1600-1662）とともに「見えない大学」を設立し、汎智学構想は広く知られるようになった。

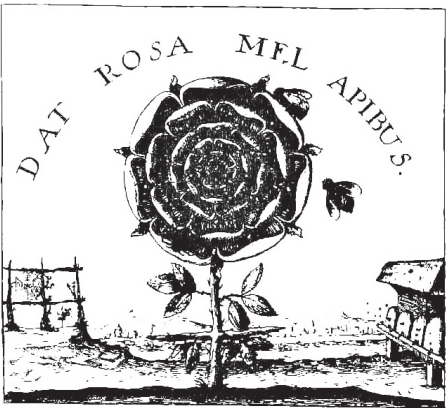


図43 哲学者の薔薇園で咲く「神秘的薔薇」は十字架の幹を持ち七枚の花弁がある。蜂による受精は錬金術の暗喩を示している。薔薇十字団の自然神秘主義を想起させる。  
ロバート・フラッド、1629年

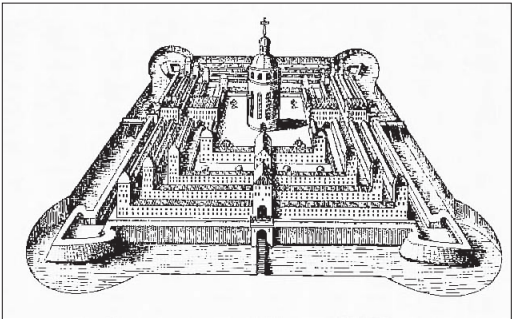


図44 クリスティアノポリス  
ヨーハン・ヴァレンティン・アンドレーエ『クリスティアノポリス』1619年

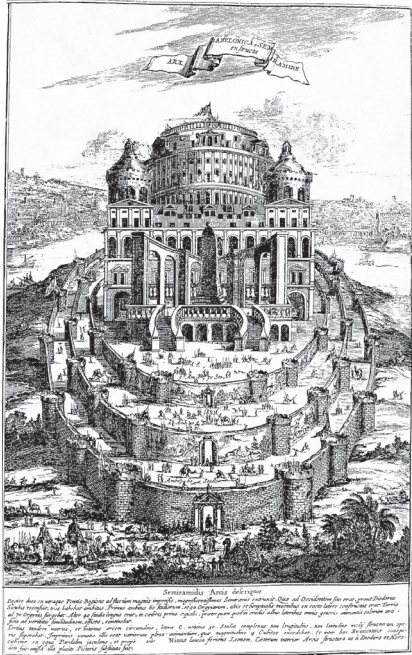


図45 絵が描かれたセミラミスの城壁。  
アタナシウス・キルヒャー『バベルの塔』1679年



## 第Ⅱ部 イギリス田園都市と心霊主義

第Ⅰ部では17世紀のマニエリスムの時代を中心として、円環の形而上学と階層的連鎖の観念が、いかに文学や庭園や建築や都市に顕現してきたのか検証した。第Ⅱ部では古代ギリシャ時代から17世紀にかけて円環や階層的連鎖の観念が、断続的に顕現してきたその現象を、どのような歴史的秩序のなかに解釈できうるのか論考し、それをもとに18世紀以降の近代における観念に歴史の新たな解釈の可能性を提示してみたい。

### 第4章 気候文明史からみた円環の形而上学

第Ⅰ部では、地上における庭園や建築や都市に顕現した円環の観念を、天界の星辰の照応として解釈できるということについて論じた。ではこの円環の観念は歴史的にどのように顕現してきたのであろうか。ここで注目するのは純粋な科学として、太陽という星辰と地球の文明との関係である。地球は1万年前に最後の氷河期を迎えたが、その後も極小期と呼ばれる小氷河期が数百年おきに地球を襲っていることが知られている。それが都市文明の盛衰を決定付けている。

#### 第1節 気候と文明史

都市文明が生まれた中世、すなわち8世紀以降の太陽活動と文明との関係について論じたい。その理由は、本論が都市における観念の歴史を対象としているからである。しかし気候が文明に対してどれほどの影響を持つものなのであろうか。まずはそこから論じ始めたいと思う。

#### 1. 氷河期とヨーロッパ文明

氷河期は一万年前のウルム期を最後に終息した。その後地球の温度は急激に4度ほど上昇し過去八千年にわたり起伏はあるものの温暖な状態が現在にまで続いている。そして紀元前一千年頃から上下1度の範囲で細かな変動が起きている。これが極小期とよばれる小氷河期である。特に都市文明が生まれた10世紀頃から現在に至る千年程の間には5回ほどの小氷河期が確認されている。

わずかに1度前後の地球の温度の変化が文明に影響

など与えるのかという素朴な疑問がある。しかし小氷河期には食料の生産が低下し飢餓が認められ、ペストやコレラが都市人口を激減させている。

#### 2. 氷河期と文明の様態

文明は寒冷期から温暖な時期を過ぎてまた寒冷化するという反復の過程の中で進展している。そのリズムと文明には次のような特性が認められる。

寒冷化が始まると人々は禁欲的となる。そして食料が減り飢餓による家族の死、あるいはペストなどによる友人の病死をまえに内省化する。非官能的な知的な生き方を追求する。これは新しい人間観を創出する。一方で飢餓で人々は食料の貯蓄を考えるようになる。そして自然に翻弄されることから脱却するために自然を支配することを考え始める。歴史的にみると小氷河期には常に革命が認められる。ルネサンスや産業革命などは氷河期の典型的な現象である。

そして温暖化が始まる。もはや食料不足はない。疫病も終息する。将来のことを心配する必要はなくなった。富を放蕩し、刹那的な享楽に身を任せようになる。寒冷期の革命パラダイムを継承するだけで文明はそれ以上発展することはない。文明は過去の思考の枠組にとらわれており、その枠内での努力に留まる。(注59)

#### 第2節 極小期とルネサンス

小氷河期という気候変動とは具体的に歴史上どのような時代に生じていたのであろうか。それは観念の歴史とどのように関係していたのであろうか。気候文明論の仮説に基づいて、極小期の歴史をルネサンスと革命という文明現象との相関のなかに解釈し直す。

#### 1. ルネサンスとヨーロッパ文明

中世の頃からの極小期は5回確認されている。これはおもに太陽黒点の数と地球上の氷河期との相関性から研究されている。

最初はオールド極小期である。1010年から1050年の期間だ。その次はウォルフ極小期である。1280年から1340年の期間だ。その次はシュペラー極小期である。1420年から1540年の期間だ。その次はマウンダー極小期である。1645年から1715年の期間だ。その次はダルトン極小期である。

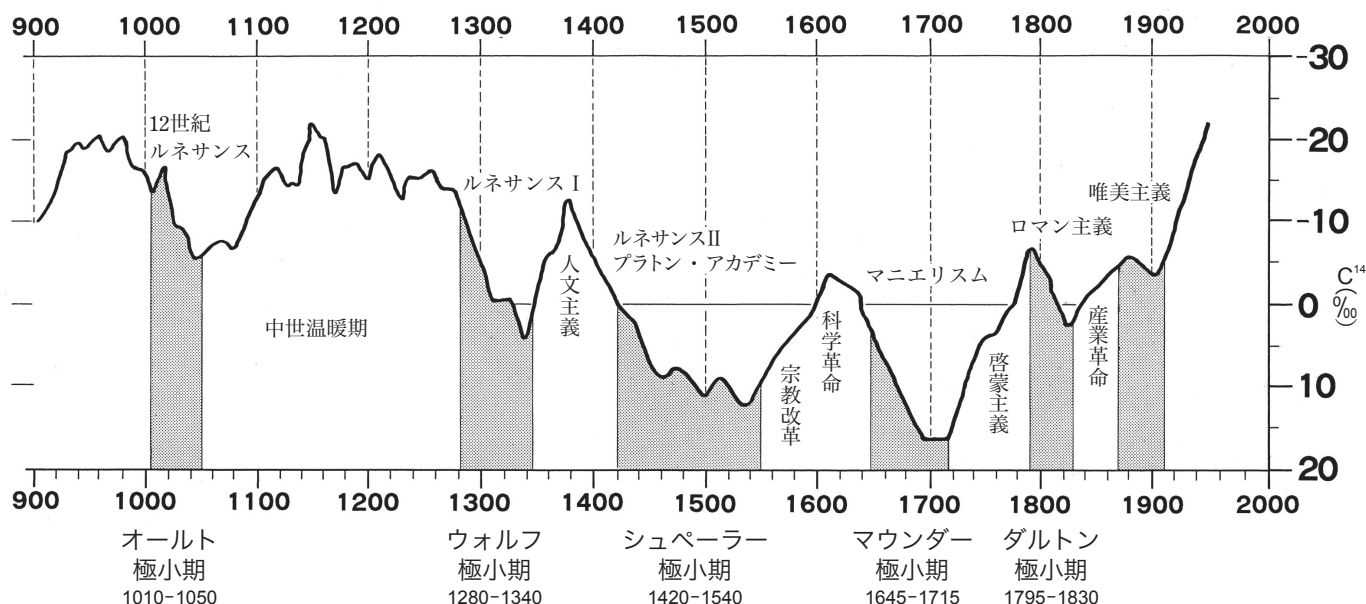


図46 小氷河期と西欧文明。  
「放射性炭素含有率から分析した太陽活動の強弱期」のグラフをもとに筆者作成。  
U. S. Geological Survey "The Sun and Climate"  
出典：田原康『気候文明史』日本経済新聞出版社、2010年

1795年から1830年の期間だ。そして、極小期ではないが世紀末の1870年から1910年の期間には寒冷化し、農業不況が認められている。[図46]

興味深いことはこの極小期がルネサンスや革命と相関していることである。ルネサンスとはギリシャ文化を受容し消化することによるキリスト教文化の復興を意味する。

1010年から1050年のオールト極小期の期間とは12世紀ルネサンスと呼ばれ、アラビア文化がイベリア半島からヨーロッパ大陸へと伝播した時代に該当する。いわゆるレコンキスタ国土回復運動である。981年頃からはじまり1085年にトレドが奪還され1492年のグラナダ陥落で終結する。このときアリストテレスの同心天球像やプトレマイオスの宇宙観やピュタゴラス派の幾何学あるいは占星術や錬金術が大陸に伝えられた。世界を階層的連鎖とした円環の観念がキリスト教文明へと侵潤していった。

1280年から1340年のウォルフ極小期の期間はイタリア・ルネサンスの時代に該当する。ダンテやペトルカやボッカチオが真の人間性を謳いあげた人文主義の時代である。この時代は中世の延長でありアリストテレス的な自然観が支配した。人々は自然の中に調和された比例関係を発見し、万人に有効な美の基準が存在することを信じていた。ここでは階層的連鎖の観念が自然と神を結び付けている。[図47]

1420年から1540年のシュペーラー極小期の期間

はプラトン・アカデミーがフィレンツェに設立され、ヘルメス主義がキリスト教と結び付いたイタリア・ルネサンスの第二期に該当する。新プラトン主義が精神世界を圧倒したという意味でウォルフ極小期のルネサンスとは異なる。[図48]

1645年から1715年のマウンダー極小期の期間がマニエリスムの時代に該当する。ルネサンスの時代に構築された宇宙的な調和に基づいた円環の世界観が、カトリック的な宗教的世界像とともに崩壊しはじめ、人間のなかにおいてのみ宇宙の完全な世界観が見いだせる時代となった。イギリスではケンブリッジ・プラトニストが活躍し、物質と精神の分離に抵抗した。この時期に形而上詩が生まれ、記憶術を空間化した同心円状の円環をなすユートピア都市が生み出された。[図49]

1795年から1830年のダルトン極小期の期間とは啓蒙主義以降に訪れた史上最後の小氷河期である。この時代とは産業革命とイギリス心霊主義の時代といえるであろう。芸術の領野ではロマン主義に該当する。シェリーやブレイクが心霊主義に基づいた世界観を描いた。これについては第5章で詳述する。[図50]

小氷河期ではないが1870年から1910年には寒冷期があった。これは温暖化の産業革命の時代の直後の世紀末に該当する。新ロマン主義あるいは唯美主義のデカダンスの時代として特徴付けられる。イギリスでは神智学が活発に活動し始め、ハーワードにより田園都市が構想された。



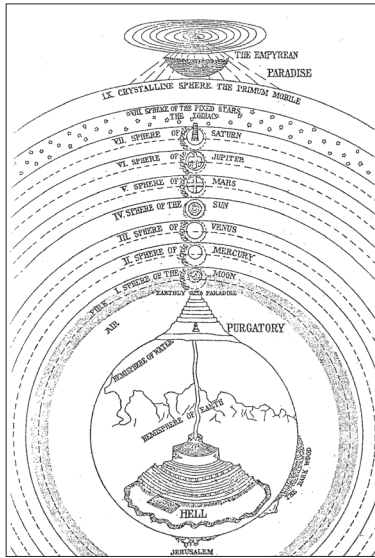


図47 ダンテ『神曲』における地獄から天国への階層的円環図。  
Michelangelo Cactani,1855



図48 エリザベス女王が君臨する宇宙。16世紀。占星術の象徴力は絶対専制君主の保証として使われていた。諸惑星と天球の資性がエリザベス女王の本性を高めた。天なる世界が神意により女王を支えていた。女王は小宇宙の最高権力者であった。

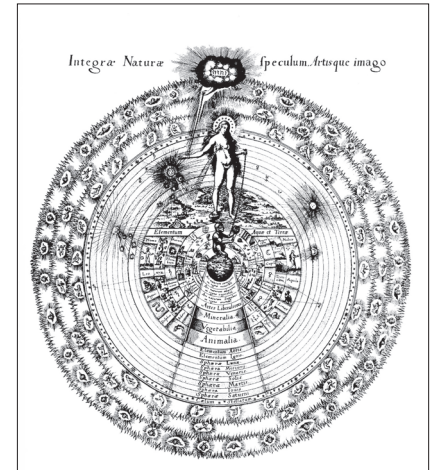


図49 プトレマイオスの宇宙観と占星術を融合させたロバート・フラッドの世界観である。天使の三位界に囲まれた恒星天、諸惑星天そして中央に地球が描かれている。全ては天使の摂理により支配されている。下方では鉱物界、植物界、動物界に囲まれた猿のような人間が描かれ、上方には世界なる母が唯一神の意思を明示して伝達する。ロバート・フラッド『両宇宙誌』第一巻、1617年

### 第3節 氷河期と円環の形而上学

地球の気候の変化から、それぞれの小氷河期において芸術運動との相関が認められた。第3節ではこれまで第1部で論考してきた円環の形而上学や階層的連鎖という観念の歴史をこの気候文明論の仮説の枠組のなかで解釈する。

#### 1. 氷河期と円環の形而上学

それぞれの寒冷期をグラフからみると、どの極小期もその谷の前半から底にかけてたところに該当していることが判る。その直後に気温の谷から温暖化がすすんでいる。革命はこの谷から温暖化に向かう上り坂で起きている。シュペラー期の宗教改革と科学革命、マウンダー期の啓蒙主義そしてダルトン期の産業革命がそれに該当する。一番寒い時期に新しい時代の萌芽が認められる。

ではグラフの頂上から寒冷化が始まって気温が低下していく時期とは何か。実はこの時期がルネサンスやマニエリスムやロマン主義そして世紀末の芸術が開花する時期に該当する。その特徴は、その直前の温暖化の時期に革命で生まれた新しいパラダイムの枠組に固執し続けているような典型的な文明の様態を示している時期といえるであろう。最後まで過去の世界観から脱却できなかった

芸術や文化は、結果として形而上化そして観念化していったと解釈できる。

その時期こそ円環の形而上学が浮上し、階層的連鎖の観念が顕現した。では18世紀の啓蒙主義、すなわちマウンダー極小期後の谷を上ったあと、神なき時代である近代とはどのように解釈できるのであろうか。



図50 「日の老いたる者」  
このサトゥルヌ的な創造神ユリゼンが太陽の中心に自分の頭を据えている。神の背後に描かれたシルエットの赤い円環は天界を象徴する。逆光の中で神が手に持ったコンパスで描くのは「天の創造力が凍りついた病的な」地上の肉体である。ウィリアム・ブレイク『ヨーロッパ一つの予言』1794年

## 第5章 心霊主義の時代

氷河期と都市文明の歴史の相関において、形而上化し観念化する傾向は温暖期が絶頂に達した直後から生じていることが判明した。しかし神なき啓蒙主義以降の時代における小氷河期の時代の円環の観念の歴史はどのように解釈できるのであるうか。イギリスの19世紀を中心とした心霊主義という特異な社会状況を検証する。

### 第1節 人間中心主義の時代

18世紀の啓蒙主義の時代は観念の歴史において大きな転換点となった。(注60)18世紀末から19世紀の小氷河期とはダルトン極小期(1790-1830)である。この時代は啓蒙主義に続く時代である。神に代わって理性を持つ人間が世界を支配する主役に躍り出た。カントの『純粹理性批判』(1781)とフランス革命(1789)は、前者では神を人間が駆逐し、後者では理性がキリスト教を駆逐した。

#### 1. ダルトン極小期(1790-1830)の時代

ロンドンのテムス河が氷結した1716年あたりを底にしてマウンダー極小期は温暖化に向かった。ホッブス(Thomas Hobbes 1588-1679)やロック(John Locke 1632-1704)そしてニュートン(Isaac Newton 1642-1727)は中世のアリストテレスの自然学を否定し、機械論的自然認識がベーコン(Francis Bacon 1561-1626)やデカルト(Rene Descartes 1596-1650)により推し進められ、人間が自然を支配しようとした。18世紀には宗教は限界に至った。1774年に生まれたユニテリアンは真っ向からキリスト教の原罪を否定し、人間精神の限らない自由と能力を信頼し人間の自我を神と同一視しようとした。超自然的現象は否定され、啓示神学は自然神学へと変化していった。人間は神の世界から離れ、キリスト教倫理も理論論として近代宗教哲学へと変化していった。神が創造した自然を探究して神を正当化する自然神学は、啓蒙主義を経て、神性が排除され自然科学へと変容していった。人間は神の叡知に隠された自然の法則を解き明かし、神を理解する立場に立った。1830年から1840年の間に神中心の時代から人間中心の時代に移行してしまった。(注61)

#### 2. 内省化する世界観

しかし気候は19世紀に入ると寒冷化が進む。食糧不足が慢性化し1846年頃にはコレラが流行するなど、1840年代は「飢饉の時代」と呼ばれるほどであった。(注62)マウンダー極小期に人間の内省化が始まる。

1789年のフランス革命失敗は理性主義に欺瞞を抱かせ、19世紀初頭のイギリスで社会不安を誘発した。啓蒙主義の進歩観は知識を増大させた。それは人々の心から神を奪い去り、精神的なよりどころが人々から失なわれた。ダーウィンの進化論はそれを決定的なものとした。

神なきあとの時代は孤独との戦いである。それは近代的個人にとって不可避なものであった。かつては和解、救済、統合の物語があり千年王国説に従っていればよかった。人々は精神的な依存の対象を求めている。しかしキリスト教ばかりでなく非国教派のバプテストやメソジストも貧困に喘ぐ労働者たちを救うことはできなかった。労働者たちは無神論者へと陥った。

1770年代にキリスト教の秩序が崩壊すると同時に占星術が復興してきた。神秘家たちは外的な神に代わって、神聖な世界観を自己自身のうちに求めるようになった。汎神論的な外的自然から離れ、心の深淵の奥に神へと通じる道を模索した。個人個人の内部に神聖な源泉を見いだそうとした。

#### 3. 内省化から心霊主義へ

ヴィクトリア時代(1837-1901)は無神論の時代である。ユニテリアンのような世俗主義的なものが生まれるなかで、人々の信仰からの乖離は進んでいく。人間の理性による道徳的で進歩的な判断力を考えれば、聖書は不要とされた。永遠の原罪を前提とするキリスト教はもはや人々を惹き付けることができなかった。

それを補うように彼らの心を埋めたのが心霊主義である。特にイングランド北部の工業地帯の労働者を中心として、1850年代までに人々の心に浸潤していく。無神論者や世俗主義者が神に代わり心霊主義を受け入れるようになった。こうしてキリスト教の聖餐に代わり降霊会が、司祭に代わり霊媒師が、死後の人々の世界や社会の道徳について語り始めた。(注63)

かつて神に内在された神性は、全ての人間の精神の内部の奥底に宿るものとして内省化されていく。組織としての宗教ではなく、個人の人間が心



霊主義の対象となった。個人における救済という心霊主義は、聖職者や宗教の教義という桎梏から人々を解放してくれた。イギリスでは心霊主義が、宗教に比べて死に対する恐れと社会不安を和らげるものとして受け入れられた。

19世紀になると霊媒をとおして死後の世界が明らかになってきた。天国という神の世界は、心霊主義の霊媒が語る死後の霊魂が暮らす世界にとって代わられた。天国はもはや最後の審判がおこなわれる世界ではなくなっていた。天国は女性原理の家族愛が育まれる楽園として描かれるようになった。

一方で自然神学に代わり、神を排除して生まれた自然科学を支える知識人は不可知論を信奉しており、すでに宗教は彼らから消失していた。しかしキリスト教を否定すると残るのは唯物論だけになってしまう。ここに心霊主義が知識人の心の隙間へ入り込むことを許容してしまった。(注64)

#### 4. ロマン主義と円環の形而上学

17世紀の形而上詩では、天界の世界が円環として象徴的に詠われた。それは自然神学の時代である。しかし啓蒙主義を経て近代自然科学が誕生した時代になっても、この観念を放棄しない人々がいた。それはロマン主義者たちである。彼らは文学や芸術の世界へと逃避して、17世紀に消滅したはずの観念的世界観を追求し続けた。(注65)

ロマン主義者たちは現在という状況を、そのありうべき全体性が崩壊した状態であると考えていた。あったはずの無限、永遠、絶対、全体の存在を確信し、それが失われてしまった現在、荒野から楽園であるアルケー（始源）を目指す旅に出た。現在を支配する因習や貧困や偏見や無知や差別や病気からの自由解放を志向した。(注66)

詩人だけが時代精神を直感的に把握し、変革の新しい方向を示すことができる唯一の指導者であった。そして詩だけが人間の道徳性を高めることができるのと彼らは信じていた。このためロマン主義者たちは社会論と芸術を分離しなかった。個人の探求はそのまま社会の探求への答えなのだ。知識人が起こした革命の失敗。それを克服し、詩人が無限の改革の主体となり、神なきあとの時代に、神に代わり秩序を生み出す使命を自認した。(注67)

#### 5. ウィリアム・ブレイク

ロマン主義を代表とするイギリスの詩人は1800



図51 赤く描かれた円は「丸い血の球」であり、霊感的ロスから分離させたエニサーモンである。ロスのエネルギーがロスの髪の毛を伝って流れ出て、凝結して生命の血の球となった。新たな生は円形により象徴されている。それは女性の胎盤のようにも、赤く燃える太陽のようにも見える。ウィリアム・ブレイク『ユリゼンの第一の書』1794年

年から1830年にかけて活躍した。彼らは S. T. コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge 1772-1834)、バイロン (George Gordon Noel Byron 1788-1824)、キーツ (John Keats 1795-1821)、P. B. シェリー (Percy Bysshe Shelley 1792-1822) といった人々である。

そしてロマン主義を語るうえで看過できないのはウィリアム・ブレイク (William Blake 1757-1827) である。ブレイクの『無垢の歌』(1789) はイギリス・ロマン主義の始まりを告げた。冒頭の四行「一粒の砂に世界を、一輪の野の花に天国を夢見る、片手の掌のなかに無限を、一刻のなかに永遠をとらえる」は有名である。ブレイクの絵画や詩では、観念が円環として顕現していることが認められるであろう。[図51]

霊的な経験が多かったブレイクは自然における神の存在を信じて疑わなかった。このためロックやバークやニュートンへの批判は辛辣である。ブレイクは内在する神的精神を主張していた。彼はケンブリッジ・プラトニストのヘンリー・モア (Henry More 1614-1687) を介して新プラトン主義あるいは錬金術を知っていた。ブレイクは人間を想像力へと解釈し、それが自然を支配している独自の世界観を構築した。(注68)

## 第2節 世紀末とイギリス心霊主義の時代

世紀末のヨーロッパでは1870年頃から1910年にかけて寒冷化が進み、内省化が改めて認められた。この時期は19世紀初頭の極小期におけるロマン主義の時代に良く似た文明の傾向が認められた。

### 1. 世紀末イギリスの理想主義運動

ダルトン極小期の寒冷化は1770年頃から40年間ほど続き、1830年頃に収束し温暖化へと転じた。そして食料危機を乗り越えた1840年代後半から1870年代にかけての30年間は産業革命の時代といわれている。まさに高度成長の時代であり、資本主義のもとで産業構造が大きく変化し都市化が顕著であった。その後1873年から1893年の20年間、寒冷化に伴う経済不況が訪れた。あまりに急激な寒冷化のために低体温症でロンドンでは数百名が死亡したといわれる。(注69)

この恐慌で資本主義における自由放任主義経済を確信してきた人々は自信を喪失し、無限の成長と富の蓄積の幻想は脆くも崩れた。輸出は減少し、失業者が都市に溢れた。この時代に新しい社会を構築しようとする革命的運動が次々と生まれた。1884年には三つの社会主義団体が誕生した。すなわちフェビアン協会、社会民主連盟そして社会主義同盟である。彼らは資本主義や自由放任主義を批判し、崩壊した共同体の再生、生産や富の国有化、国民生活の質の向上を訴えた。

それを理念で支えたのは1870年から1910年に認められた新理想主義運動である。これはオックスフォード大学のフェローであったグリーン(Thomas Hill Green 1836-1920)を中心としたドイツ観念論哲学に基づいた自由主義運動であった。その社会理念は道徳的有機体である。すなわち個人主義および自由主義や功利主義を否定し、集団主義を提示した。その共同体のなかで個人は良心と義務と道徳という責任意識を持ち、その共同体を国家の有機的な構成員と考えた。社会制度とは公共善が体现されたものであり、グリーンは道徳と政治を直接接続した。彼の自己犠牲と社会奉仕による社会の構築の理念が、その後の近代イギリスの福祉国家を生み出していく。(注70)

この時代の社会改革運動では現実的な国家論というよりも、ユートピアに近い観念論的な社会主義思想が跋扈した。

### 2. 新ロマン主義と唯美主義

ダルトン極小期は産業革命の時代である。この過剰な商業主義や功利主義にロンドンの芸術家たちは反発し批判し、美の重要性を訴え始めた。それは1860年頃から認められた。ところが世紀末の新ロマン主義芸術では視覚的な悦びをもたらす純粹な美が志向された。これは唯美主義といわれた。彼らは社会との係わりや道徳性からも離れ、さらに内省化していった。自然からも離反し、都市の墮落し倒錯した快楽を表現するようになった。腐敗した文明人の性倒錯としてのサディズム、マゾヒズム、フェティシズムがテーマとなった。唯美主義的な偏狭な精神は文化を沈滞させた。(注71)

新ロマン主義や唯美主義は実証主義や自然主義への反発があったために、非合理的な領域を志向した。たとえば人間性の隠れた深層の探求や当時流行していた心霊主義を志向した。前者は心理学や精神病や性倒錯や無意識や夢遊病といった領域であり、後者は降霊会や催眠術といったオカルトの領域であった。神なき後の19世紀以降の時代では内省化し、心理的あるいは心霊主義的なものとして、精神世界を社会が受容してくれる時代となっていた。(注72)

### 3. 心霊主義の時代

世紀末ロンドンでは1860年から1870年をピークとして世紀末にかけて心霊主義が大流行した。その契機は1852年10月にアメリカの霊媒師ヘイデン夫人がロンドンで降霊会をおこなったことにある。そして1855年には続けてダニエル・ダグラス・ホームという霊媒師がヨーロッパを訪れた。この発端はアメリカの1848年の心霊事件である。その余波を初めてロンドンが受けたのは19世紀中葉であった。1853年にはヨーロッパ中に降霊会が広まっていった。(注73)

しかしロンドンでは心霊主義を受け入れる準備はすでにできていた。実は1830年代から催眠術が流行していた。また外国出身の奇術師が大勢活躍しており、市内の劇場やパースロミュー大市では魔術や呪術師や手品師や錬金術師や軽業師が見世物として市民を楽しませていた。そこへ霊媒師がアメリカから訪れた。(注74)

神なき時代に心霊主義がこれほど社会に浸透した理由とは、心霊主義が信仰とは異なり、神学上の問題で悩むことも瞑想することも、そして知性も求められていなかったからである。



#### 4. 心霊主義に陥った人々

この心霊主義はイギリスの社会で好意的に受け入れられた。心霊現象と当時の奇術師のものとの境界は曖昧であり、信憑性が高いと思われていた霊媒師のトリックが暴かれることもあった。アメリカから来た霊媒師ホームの降霊会に参加したのはロバート・オーエン、ジョン・ラスキン、作家のアンソニー・トロロープとサー・ブルアー・リットン、詩人のロバート・ブラウンといった面々であった。(注75)

この心霊現象に対する疑義をただすために正面から取り組んだのは、なんとケンブリッジ大学とオックスフォード大学の教授たちが1882年に結成した心霊研究協会である。その後ノーベル賞を受賞するような学者たちが真剣に心霊現象について調査報告をおこなっている。(注76)

学者ばかりではなかった。もっとも有名なのはロバート・オーエンであろう。彼はアメリカで心霊主義に沈溺し、80才を過ぎて1853年に突然心霊主義者となった。(注77)

また生物学者のウォレス (Alfred Russel Wallace 1823-1913) は1862年にマレー半島の調査を終えて帰国したときに心霊主義者となり、降霊会に入り浸りとなっただけではなかった。1869年には精神に内在する意志の存在による生物の進化を確信し、自然選択説から離脱した。その後彼は心霊活動に没頭し、生涯にわたり心霊主義の唱導者かつ擁護者となった。(注78)

またイエイツ (William Butler Yeats 1863-1939) は1885年に神智学協会に入会していたが、1890年には鍊金術師集団の「黄金の夜明け団」に入会し、その後1911年頃には盛んに降霊会に参加して霊との会話に熱中した。彼はアイルランドの妖精の世界を死者の世界と同じものとして考えていた。

ロンドンの世紀末には心霊主義の団体が二百を越えていた。その団体は全国にネットワークを形成し多くの人々が参加していた。それらの団体からは心霊関係の雑誌や本が出版され、様々な心霊現象が報告されていた。ヴィクトリア朝後期の世紀末のイギリスとはこうした心霊主義を支えた神秘主義の社会であった。

一方で薔薇十字会、ユダヤ神秘主義カバラ思想、ヘルメス思想ばかりでなく、東方の仏教やヒンズー教などが、オカルト思想としてキリスト教の代わりに、あるいは西洋文明から逃避したい人々の避難所となっていた。(注79)

## 第6章

### イギリス田園都市運動と心霊主義

イギリスの19世紀から20世紀初頭にかけて社会を跋扈していたのは新たな精神世界を提唱する様々な心霊主義団体や神秘思想であった。このなかからイギリスの近代社会は生まれた。政治、経済、文化そして芸術も例外ではない。イギリス世紀末の新教育運動に着目し、心霊主義を背景に、田園都市運動との関係を検証してみたい。

#### 第1節 新教育運動と神智学

イギリスにおける労働者家族子弟の教育への取組は、国家ではなくキリスト教の慈善活動の一貫としておこなわれてきた経緯がある。そして世紀末に新たに教育問題に真っ向から取り組んだのは、新しい精神世界を唱えた心霊主義者による神智学協会であった。

#### 1. イギリス近代教育運動の歴史

イギリスにおける大衆教育の歴史は18世紀頃から認められる。貴族階級の子弟は別にして、労働者階級の子弟ばかりでなく労働者自身あるいは女性のための教育はほとんど配慮されることはなかった。当時の識字率の低さは驚くほどであり、多くの児童は自分の名前すら書けなかった。(注80)

すでに清教徒革命において修道院が解体されたとき、国民的教育制度の必要性が唱えられていた。王政復古の後に中産階級の子弟のため、1698年に初めてキリスト教知識振興協会により慈善学校が設立された。さらに日曜学校や労働者学校など慈恵的な教育機関がそれに続いた。18世紀までの国民教育は、全て宗教団体による慈恵的な素人教育に依存していた。

19世紀に入り教育論が活発となった。その契機はフランス革命である。その衝撃からイギリスでは成人教育が本格化する。各地に大学が設立された。それは児童を工場労働から解放する運動や、女性が自立した社会人として権利を求めていく運動の歴史と軌を一にしている。

しかし国民教育が本格的に取り組まれたのは1870年の教育法が成立してからである。1876年に初等教育が義務化され、1891年完全に無料化された。このときブルジョアジーと国教徒は税金を児

童教育のために使うことに反対を表明している。  
(注81)

## 2. フェビアン協会と神智学

フェビアン協会は1884年に設立され、労働者の組合運動を中心とした社会主義改革を目指し、後の労働党結成へと至る。このフェビアン協会で女子の工場労働者の争議に取り組み、無償の世俗教育や貧困児童の無料給食の活動を続けていたのはアニー・ベサント (Annie Besant 1874-1933) であった。ベサントは家父長制や英国国教会の保守的な体質に辟易しており、教育や職業において、女性の権利の制約の解放を主張していた。しかし突然ベサントは世俗的なフェビアン協会を去り、神智学協会へと入会してしまった。(注82)

ベサントはブラヴァツキーの『秘密の教義』の書評を依頼されたのが契機となり、1888年に神智学協会のヘレナ・ブラヴァツキー (Helena Petrovna Bravatsky 1831-1891) と出会う。翌年にはフェビアン協会から神智学へと転じてしまう。1891年にブラヴァツキーが死ぬと神智学の二代目会長に就任している。ベサントは教育事業に力を入れるようになった。この神智学はもちろん神秘主義的な心靈主義者の団体であった。しかしその組織の一部門に教育を担当する神智学教育組合 (Theosophia Fraternity in Education) があった。これが当時の新教育運動のなかで重要な役割を担っていた。(注83)

## 3. 新教育運動と神智学

近代イギリスにおける教育改革運動は19世紀末から1930年代にかけて展開された。それを総称して新教育運動という。この運動では、子供の創造性を重視するというロマン主義的な子供観が支配していた。それは当時の公共教育制度への不満と危機感のあらわれでもあった。

この新教育運動を支えていたのは、フェビアン協会、オーエン主義、ラスキン主義、モリス的ギルド社会主義、キリスト教社会主義、ユニテリアン、クエーカー教徒、トルストイ主義そして田園都市運動と神智学に係わった人々であった。

新教育運動は様々な種類の教育改革を進めていた。大学の拡張や非行少年少女のための教育とともに、保育・幼児教育を重視した。その特徴はいくつか指摘できるであろう。近代が解体した共同体の新たな構築、公的な社会慈恵活動、神秘主義

的な精神性の追求、社会改革政治運動などである。

すなわち世紀末のイギリスは近代社会、近代教育への模索の只中にあり、全ての可能性にあらゆる人々が取り組んでいた時代なのである。(注84)

神智学ではブラヴァツキーは『神智学の鍵』の第十三章「神智学と教育」で児童教育に言及している。そこでは、子供の内的潜在能力と内的感覚の発達的重要性について述べられている。神智学において新教育運動は、1917年にエンソア (Beatrice Ensor 1885-1974) が神智学教育組合の代表理事になったことにより大きく展開する。マルセイユ生まれのエンソアはイギリスでは婦女子教育の女性視学官を務めていた。1908年に神智学協会に入会している。彼女は1915年の神智学教育組合の設立に加わった。そして翌年には神智学教育組合の代表理事に就任する。エンソアは「子供に内在する精神力を解放し、人々が真の幸福を見いだせる新世界を創造できる」と確信し、モンテソーリ (Maria Montessori 1870-1952) の教育法を導入した。その教育理念をもとにして、1915年には田園都市レッチワース (1903) に神智学学校を二校開校している。(注85)

神智学教育組合は田園都市レッチワースとオックスフォードで会合を重ねてきたが、組合の規模が大きくなり500名を越えてしまった。神智学教育組合代表理事のエンソアは、1920年に国際連盟が発足すると、1921年に名称を変更し新教育連盟とした。その目的は神智学教育組合を、国際的な組織にするためであった。ロンドンの神智学教育組合の組織を基にし、世界に555支部をもつ神智学協会のネットワークにより、新教育連盟は設立当時から全世界の人々が参加する国際的な教育機関となった。(注86)

第二次世界大戦後、新教育連盟はユネスコの設立とともに国際連合の中の組織となり、パリに本部をおいた。1966年には名称を世界教育連盟へと変更している。

### 第2節 田園都市運動と神智学

新教育運動を推進したのは神智学協会であった。その運動を支援したのは非国教徒や社会主義者や神秘主義者の団体であった。こうした団体のなかに田園都市運動が含まれている。そして教育組合の会合はイギリス最初の田園都市レッチワー



スで開催され、神智学の教育理念に基づいた学校が田園都市レッチワースに建設された。

## 1. 田園都市協会と新教育運動

当時の社会改革に取り組んだ人々は多くの団体に重複して参加し行動していた。こうした背景のなかに田園都市運動をとらえていくことにより、単なる技術的な都市計画論ではない、イギリスの田園都市運動の本来の姿が浮上してくる。

例えば新教育運動に参加した団体を挙げると、新生活連盟(注87)や土地国有化連盟がある。これは田園都市の土地の共有化に実現されている。この運動を勧めた人々のなかには、熱心な心霊主義者へと転向したウォレスがいる。ウォレスは晩年に社会主義者として活動し、朋友のハワードが提唱した田園都市思想を支持し、田園都市協会設立において支援の手を差し伸べた。(注88)

フェビアン協会は労働者の生活環境、教育環境の改善に取り組んだ人々の団体であり、その思想は田園都市の住環境や公共施設に読み取れる。

オーエン主義者は共産主義的な生産共同体を主張している。オーエンは労働者の教育に熱心であり「性格形成学院」により環境が個人の能力を発揮するうえで重要であると主張し実践した人物であることを踏まえるならば、田園都市の自然環境について新教育運動の観点から新たな評価がなされるべきであろう。

オーエンもまた80才にして心霊主義者へと回心した人物である。ラスキン主義者は社会道徳としての美的共産的社会的信望者であり、ロマン主義的な社会観を持っている。

新教育運動のもう一つの支援団体であるグリーンの新理想主義はラスキンの思想を継承している。グリーンは倫理と道徳を兼ね備えた慈善共同体に基づいた有機的社會を提唱してきた。こうした個人の責任ある行動を前提としている理想社会としての田園都市の姿のもう一つの側面が浮上してくる。

## 2. 田園都市運動と心霊主義

田園都市運動は、当時の新生活運動や新教育運動とともに取り組まれてきた思想運動の一つであった。それは1899年の協会設立により具体的に独立した社会改革運動となった。協会の設立は1898年にハワード(Ebenezer Howard 1850-1928)が出版した『明日の田園都市』を契機としている。

田園都市協会の事務所は土地国有協会の一部を間借りしたものである。その事務所運営においても支援を受けている。この土地国有協会はウォレスが創設した協会であり、彼はハワードと共通の関心である社会主義と心霊主義をとおして古くからの知り合いであった。

最初の田園都市レッチワースの設計を担当した建築家レイモンド・アンウィン(Raymond Unwin 1863-1940)はウィリアム・モリス(William Morris 1834-1896)の社会主義同盟へ1855年入会し、その機関誌で積極的に論文を発表していた人物である。相互扶助の共産主義的社會を提唱したクロボトキン(Pyotr Alekseevich Kropotkin 1842-1921)と交流を深め、1902年にフェビアン協会へ参加していた。(注89)

この田園都市協会の設立に参加していたジョージ・キャドベリー(George Cadbury 1839-1922)とウィリアム・リーヴァー(William Hesketh Lever 1851-1925)はともにクエーカー教徒の実業家であり、それぞれ自分の工場従業員のための社宅として環境の優れた村を建設したことで知られている。

キャドベリーはバーミンガムのチョコレート工場に付設した田園工場村ボーンヴィルを1893年に建設し始めていた。一方でリーヴァーは石鹼工場に付設してポート・サンライトという田園工場村を1888年から建設に着手していた。

クエーカー教徒は非国教徒として政界や公職や大学から排除されていたため、実業界で成功を収めた信徒が多いことで知られている。とくに鉄道や製鉄産業ではクエーカー教徒の実業家の資本がイギリスの近代化を決定付けている。クエーカー教徒は社会慈善活動に熱心であり、労働者のために学校を設立したり、社会保障を整備するなど、イギリスの近代福祉国家において先導的な役割を果たしてきた。(注90)

田園都市レッチワースに住でいたのは、田園都市思想に共鳴した人々であった。彼らは中産階級の専門職やビジネスマンが多かった。思想的に自由で開放的な人々であり、菜食主義者、エスペランティスト、瞑想主義者、オープンエア生活者、そして多くのクエーカー教徒をはじめトルストイ主義者や社会主義者たちであった。またレッチワース演劇協会や自然主義者協会など文化、福祉、政治、教育などのテーマを共有する団体が1907年の時点で65団体あり活動をしていた。(注91)

3. 田園都市における神智学教育

神智学のブラヴァツキーの教育思想を継承したエンソアが田園都市レッチワースに神智学の学校を開校したことはすでに述べた。一校目はガーデンシティー神智学学校であり二校目はアランデール・スクールである。ともに1915年に開校したが、当時すでに神智学協会はインドで1913年に2校、フランスに1校を開校していた。

アランデール・スクールは神智学教育組合を設立したジョージ・アランデール (George Arundale) の名に因んでいるが、神智学教会の思想にもっとも沿った学校であった。神智学教育組合の「教育の新理想」に従い、モンテッソーリ教育を導入したモデル校であった。そして1919年には三校目のセント・クリストファー・スクールが開校されたが、アランデール・スクールと合併し、セント・クリストファー校に統合された。この学校の図書館には現在もブラヴァツキーの肖像画が掲げられている。

そのほかにも四校の神智学系の学校が設立された。このクリストファー校に隣接して、1908年にはオープン・エア・スクールとよばれた学校クロイスターが建てられた。自由教育に傾倒した女性篤志家が神智学的瞑想の場として建設したものである。現在はフリーメーソンの地方本部として使用されている。(注92)

第Ⅲ部『明日の田園都市』と心霊主義

第Ⅱ部では氷河期と文明の関係を気候文明史の視点から解釈し、その枠組の中で世紀末のイギリス社会における観念の歴史の解釈をおこなった。第Ⅲ部では神に代わって心霊主義が支配したイギリスの世紀末社会に焦点を絞る。そして本論の中心的テーマであるハワードが提示した田園都市構想を、観念の歴史の文脈から改めて論考する。

第7章  
『明日の田園都市』におけるモダニズム

田園都市運動とは都市計画運動ではなく新教育運動との関連において神智学協会と深く係わった思想運動であった。それを物語るように、最初に完成した田園都市レッチワースに移り住んだ人々のほとんどが、田園都市運動の思想に共鳴した非国教徒や心霊主義者たちであった。そしてその張本人であるハワード自身も神智学徒であった。

第1節 ハワードと心霊主義

カンパネッラの『太陽の都』やロバート・オーエンのニューナラークなどのユートピア都市においても神秘主義思想や心霊主義がその背景にあることを否定できない。あるいは同時代の田園工場村がクエーカー教という宗教団体の信条に依拠して建設されたものである。また田園都市運動が神智学協会と深くかかわった新教育運動とならぶ社会改革運動であったという事実は、ハワードの田園都市構想を心霊主義の視座から検証しなおす可能性を示唆するものである。

1. ハワードと心霊主義

ハワード (Ebenezer Howard 1850-1928) は1850年にロンドンのバーミンガムに生まれた。1871年に21才でアメリカのネブラスカ州で農業を営んだ。1872年にシカゴへ移る。ここで偶然大火後のオルムステッド (Frederick Law Olmsted 1822-1903) の都市計画を見た。ハワードはシカゴ郊外の住宅地に田園都市のイメージを着想したといわれている。それと同時に当時のアメリカで大流行していた心霊主義の霊媒師コーラ・リッチモンド (C. T. Richmond) と接触している。(注93)



5年後の1876年に帰国したハワードは1879年にゼテティカル協会 (Zetetical Society) に参加している。シドニー・ウェッブ (Sidney James Webb 1859-1947) やバーナード・ショー (George Bernard Shaw 1856-1950) も1880年にこの協会に参加し、政治や経済や社会について議論を重ねている。

この協会でハワードは心霊主義に関する報告をおこなっている。このハワードの心霊主義に関する報告は、『霊媒と夜明け』というキリスト教心霊主義者ジェイムズ・バーンズ (James Burns) が創刊した心霊主義週刊誌の1880年4月16日号に掲載されている。ハワードはここで物質と精神の相関関係について、物質的な現象や作用が心霊的な力の顕れであり、それを人間は心霊的な力により見ることができると述べている。「人間には霊的な本性があり、それは物質的な肉体から立ち上がり、翼をひろげて空高く飛翔していく」とハワードは確信をもって述べている。(注94)

1879年にハワードはエリザベス・アン・ビルスと結婚し幸福な家庭を築いたが、1904年にハワード夫人は亡くなった。ちょうどレッチワースに最初の田園都市が建設されていたところである。ハワードは本当に妻を愛していたので、妻の死後に降霊会をとおして妻との会話を試みていた。この頃から本格的に心霊主義へと惹かれていったのではないのだろうか。(注95)

1892年頃からハワードは田園都市の構想に着手し、ロンドンの進歩派のサークルで発表し始めている。この頃ハワードはウォレスが創設した国土国有化協会の内部に相互扶助宅地協会 (Co-operative Land Society) を設立している。(注96)

1910年頃になるとハワードの心霊主義への関心は大きくなっていった。すでにハワードは神智学協会へ入会している。1910年4月14日にハワードはロンドンの英国心霊主義者同盟の大会で講演をおこなっている。そのテーマは「社会的進歩への心霊主義の影響」というものであった。この講演の内容はそのまま、英国心霊主義者同盟の会員のエドモンド・ドーソン・ロジャース (E. D. Rogers) が1880年に創刊した心霊主義の週刊誌『ライト(光)』に掲載された。

ここで田園都市とは、霊的な力が人間の心と精神をとおして社会にあらわれるという、社会進歩の場として説明されている。ハワードの社会改革の思想的背景は心霊主義であった。この講演では

神智学協会二代目会長のアニー・ベサントの『変化する世界』を引用したあとに、自分自身の回心の体験を話した。「新鮮で歓喜に満ちたエネルギーの源から流れ出してくるような自然の輝きが私の身体に入り込んできたのです。皆さん、信仰を失い悪に身を任せていた私はそれまで、霊的な力を前に心の扉を閉ざしていました。しかし、私が悪から善へと舵をきり、悪の償いをしたときに、心の扉がずっと開き、霊的な力が流れ込んできたのです。」(注97)

ハワードはこの体験の直後に『明日の田園都市』を構想し、田園都市運動が始まったと講演でのべている。こうしてハワードの『明日-真の改革に至る平和な道』の本は1898年に出版された。しかしそれはアメリカのコダック写真会社のイギリス支店長ジョージ・ディックマンが、出版費用として50ポンドを支援したおかげで三千部印刷できたという経緯がある。彼はハワードと同じようにコーラ・リッチモンドの崇拝者であり心霊主義であった。アメリカ人のリッチモンドは世界中を講演していた当時有名な霊媒師の一人であった。イギリスでも1874年1月2日号の『霊媒と夜明け』の表紙を飾っている。(注98)

こうして1902年には本は改題され『明日の田園都市』として再版された。すなわち田園都市とは「真の改革に至る平和な道」という、霊的な力が人間の心と精神をとおして社会にあらわれた進歩的な都市を意味する。それは心霊主義と社会改革運動が密接に結び付いていた世紀末イギリス社会における現象の一つといえるであろう。

しかしここで再確認しておきたいことがある。世紀末のこの心霊主義とは隠秘なものではなく、建設的で社会的なものであった。じつは18世紀啓蒙主義時代以降において産業資本主義やキリスト教に代わる精神的な世界観として社会的な地歩を占めたのである。例えば英国心霊主義者同盟とは、その設立趣意書によれば「われわれの未来への最良の準備は、エネルギーと活動性に満ちた生活であり、この世で達成できる最高の身体的、道徳的、知的水準に応じて生きる」ことである。心霊主義者たちは講演や出版活動などをとおして社会の改善と進歩を人々に訴え続けていた人々なのであった。(注99) その心霊主義者が人々の進歩を目的に取り組んだものが新教育運動であり、田園都市運動であったのだ。そのなかの一人がハワードであり、そして彼の田園都市構想であった。

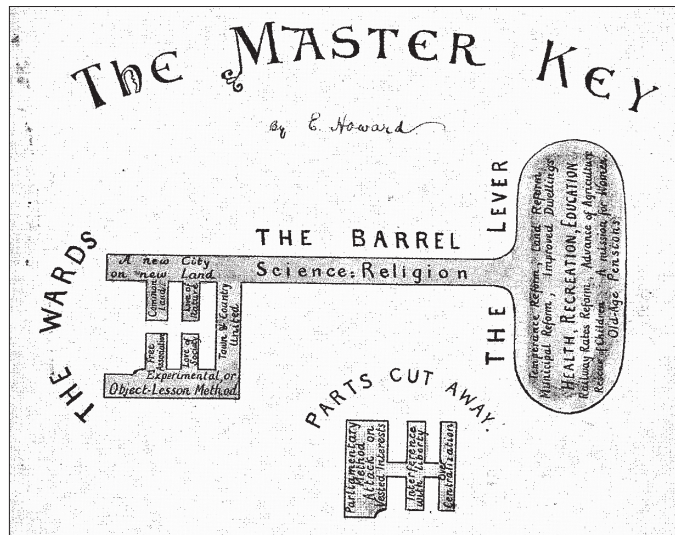


図53 「マスター・キー」の鍵に書き込まれた理念。  
部分拡大図



図52 『マスター・キー』は田園都市構  
想の初期の理論をまとめたもので  
あるが、出版されることはなかつ  
た。1893年から1896年の間。

## 第2節 『明日の田園都市』の成立と その背景

田園都市協会がウォレスの土地国有化協会の支援をうけて発足したことを踏まえると、田園都市の根本的問題の一つは都市における土地の個人所有ではなく、共同所有における共同体の理想の実現にあったのではないかと推察できるであろう。その鍵となる言葉はホームコロニーにある。

### 1. ホームコロニーと土地共同所有

ハワードは当初、田園都市のことをホームコロニーと呼んでいた。その本質は土地の共同所有にある。ではその理念の源泉とはどこにあるのだろうか。それは田園都市の本質を解く鍵である。

イギリスでは17世紀末より互助会として共済組合が職人たちの間で組織されていた。疾病、失業、出産などの保険給付を目的としたものである。これは友愛組合 (Friendly Society) と呼ばれた。この友愛組合が土地を購入して住宅を建設しようとしたが、当時の友愛組合法は組合資産投資を禁止していた。それが可能となったのは1852年の「産業および節約組合法」の制定による。協同購入し建設する協同住宅をホームコロニーあるいは協同コミュニティと呼んでいた。(注100)

そのホームコロニーの出自の一つはオーエンの千年王国論に求められる。1840年にオーエンはホームコロニー協会 (Home Colonization Society) を設立し、理想的な共同体の実現を目指している。(注101)

もう一つの出自はハワードが『明日の田園都

市』で言及しているウェイクフィールド (Edward Gibbon Wakefield 1796-1862) が1830年に設立した国立植民地協会 (National Colonization Society) の可能性も否定できない。オーストラリアやニュージーランドの植民地理論の国内への転用である。(注102)

またハワードのアメリカでの体験が背景として指摘できるであろう。当時ネブラスカ州のハワード郡に160エーカーの土地を取得している。実は1862年にホームステッド法 (自営農地法) が施行され、5年間住んで耕作すると土地を無償で貰えるようになっていたからだ。結局一年で挫折したものの、土地の無償供与は彼の田園都市の基本的な考え方に影響を与えたに違いない。(注103)

しかし思想的な直接の契機は1888年にボストンで出版された小説『顧みれば (Looking Backward, 2000-1887)』であった。社会主義者エドワード・ベラミー (Edward Bellamy, 1850-1898) はこの小説のなかで、資本主義により搾取される労働者の権利を奪還した共産主義的あるいは国家社会主義的な平等な理想社会を描いた。なかでも彼の農業の集団運営による協同社会とは田園都市思想の根幹となる理念である。ハワードは尽力し1889年にロンドンでの出版を実現させている。(注104)

1890年代にハワードは田園都市を構想し始めたようだ。ハワードは1893年に、労働共有化同盟 (Nationalisation of Labour Society) の会合で「ホーム・コロニー (Home Colony)」について講演した。その概要は『ナショナルライゼイション・ニュース (The Nationalisation News)』(1893年2月) に掲載された。しかし現実性に乏しいと批評された。





図54 この占星術の本は19世紀初頭ロンドンで最も流行した予言書の一つである。その表紙の鍵の図像は、ハワードの「マスター・キー」に酷似している。ラファエル『19世紀の占星術家』1825年。

さらに理論を構築し『マスターキー (The Master Key)』[図52]を執筆するが、出版されることはなかった。さらに1896年には『田園都市、または多くの問題への一つの回答 (A Garden City, or One Solution to Many Problems)』が『コンテンポラリー・レビュー (Contemporary Review)』誌に掲載された。しかしまたしても社会の反応はなかった。この時友人の資金援助により、1898年10月にハワードは『明日ー真の改革にいたる平和な道 (To-morrow, a Peaceful Path to Real Reform)』として自費出版することになった。(注105)

## 2. 出版されなかった『マスターキー』

『明日の田園都市』のための草稿として出版されなかった『マスターキー (The MASTER KEY)』について検証してみたい。この『マスター・キー』の5頁に問題のマスター・キーの図版が掲載されている。[図53]そこにはタイトルの下の大きな鍵の図像の内外に沢山の文字が記入されている。大きく5カ所に分けることができる。

鍵のレバー部分、鍵の軸、鍵の刻み部分、切り取られた部分そしてローウェルの詩の引用部分である。鍵のレバー部分には中央に大きな文字で「健康、リクレーション、教育」とありその上部に「禁酒改革、田舎改革、地方自治改革、住宅改革」とあり下部には「鉄道料金改革、農業促進、子供救済、女性へのミッション、老人年金」と書いてある。これは改革を推し進める原動力といえる。

鍵の軸には「科学：宗教」と書かれている。こ



図55 二つの顔を持つヤヌスは一方の顔で未来を象徴する鍵を見ている。ラ・ペリエール『よき術策の劇場』第一番、パリ、1539年

れは現実の社会改革と理想社会を結ぶものと解釈できる。ここにハワードが心靈主義と最新の科学研究を結び付けていることが明瞭に確認できる。

鍵の刻み部分には上部に「田園の新しい街」、下部に「実験手法あるいは目的的教育手法」とありその上下を縦につなぐ部分に「街と田舎の結合」と書かれている。四本の半島には「自由連合、共同所有、自然愛護、共同体愛護」と書かれている。

切り取られた部分には縦に左から「議会手法、既得権への攻撃」「自由への干渉」「過剰な中央集権」と書かれており、田園都市構想実現への障害となる諸問題が書かれている。これが現在では鍵の刻みの部分にぴったり収まっており、扉が開けられないとでも主張したいのであろう。

最後の部分はアメリカの詩人ローウェル (James Russel Lowell 1819-1891)の『現在の危機』から引用された10行の詩が掲載されている。これは『明日の田園都市』の扉のタイトルページにも掲載された。「新しい状況が新しい義務を悟す、時間は古いものをみたこともないものに変えるのだ。真実について行こうとするものは、たえず上を向いて前に進まなくてはならない。見よ！我々の前には、真実の炎が燃え輝いている。我々は放浪者ノマドであらねばならない。我々のメイフラワー号で海原へと乗り出すのだ。絶望的な冬の海原へと。血のように赤錆びた過去の鍵で、未来の門を開けようとするな。J. L. ローウェル」すなわちマスター・キーとは「未来の門」を開ける鍵と解釈できる。

この『マスター・キー』とそっくりな図版がある。それはラファエルの『19世紀の占星術家』(1825)という本の表紙である。本の副題は「未来の出来事に関するマスター・キー、古代密儀への案内、オカルト学の完全な体系」と記されている。その表紙の中央にはマスター・キーが描かれてお

り、それを黄道十二宮の穹窿が取り囲んでいる。ここでは占星術が、未来の出来事を解き明かすことのできるマスター・キーであると解釈できる。[図54]明らかにハワードの図版に酷似している。

このラファエルという人物は本名ロバート・クロス・スミス (1759-1832) といい、1822年頃から占星術の本を執筆し始め、1824年に週刊誌『流浪する占星術師』を発刊した。ついで月刊誌『ウラニア』を発刊するが、そこにはウィリアム・ブレイクのホロスコープなどが掲載されていた。こうした原稿を編集し直したものが『19世紀の占星術師』であり、当時のイギリスの代表的な魔術書として知られていた。(注106) ラファエルの本はベストセラーとなり、彼の死後もラファエルの筆名で更新され続けた。ラファエルの名を冠した天文暦は現在でも出版されている。(注107) このためハワードがこのラファエルの本を知っていた可能性は否定できない。

ローウェルの詩もラファエルの本の副題でも、マスター・キーは未来への扉を開ける鍵なのである。それを裏付けるのは、16世紀にはじまったエンブレムというジャンルの図像の事例である。鍵を扱った典型的な事例の一つは、1539年にパリで出版されたラ・ペリエールの『よき術策の劇場』の第一章に掲載されたエンブレムである。中央のヤヌス神は二つの顔を持っており、左の顔は過去の記憶を見つめ、右の顔は鍵を見て未来を予測していることを示している。常に古いものを振り返り、新しいものを見通すことが肝要であることを訓じている。[図55] こうしたエンブレムはイギリスでも16世紀中葉から作成され、多くのエンブレム集が出版されていた。(注108)

このエンブレムにおいても、鍵は未来を開くものとして記号化されていることが判る。キリスト教では死後昇天するときに、天国への扉を開けるものとして鍵の意味は記号化されている。ハワードの『マスター・キー』とはこうした16世紀からのイコノロジーを踏まえ、当時流布していたであろうラファエルの天文暦の表紙を引用し、占星術という心霊主義社会の背景のなかで、未来の新しい社会である田園都市へ至る道への扉を開く鍵として構想された『明日の田園都市』を表象するものであると推察できる。

さらに彼が信仰した神智学のブラヴァツキーが1889年に著した本の書名『神智学の鍵 (The key to Theosophy)』から影響を受けたことが推察される。

第3節 田園都市のダイアグラムと心霊主義

田園都市構想が興味深いのはそのダイアグラムである。全てが円環をなしている。これは円環の観念の歴史の最後に顕現したものとイえるであろう。そこには円環に託された世界観があるはずである。世紀末という時代は形而上的な理念が認められる典型的な時代の構造を気候文明史が明らかにしている。ハワードの構想に円環の観念を検証する。

1. ガーデン

『明日の田園都市』の序言でオズボーンは田園都市という言葉はすでにロングアイランドで用いられていたが、それを知らずにハワードが使い始め、世界に流布したと述べている。すなわち引用や盗用ではなくハワードが自分で着想したようなのである。アメリカを始め19世紀中葉にはすでに10を越える使用事例があることを彼は指摘している。

ガーデンという言葉はそのままエデンの園を彷彿とさせる。その理由の一つはマスター・キーが天国への扉の鍵であるという象徴的な意味をキリスト教では担っていたからである。天国には二種類の都市があった。神が住む新エルサレムとアダムとイヴの住むエデンの園である。前者は方形をなし、後者は円環状の楽園として描かれるのが常であったことはすでに述べた。しかしエデンの園は中世の地図では地上に描き込まれているのが常である。天国の写しとして地上に作られたエデンの園は円環をなす。[図56]

ハワードの「マスター・キー」では田園都市はカントリーとタウンの結合 (Town & Country United) として示されている。また「三つの磁石」でも田園都市はカントリーとタウンの結婚として示されており、両者が融合し止揚されたものがガーデン・シティとなっている。直訳すればエデンの園の都市である。だからこそダイアグラムでは素直に円環によりガーデン・シティは表象されていると考えられる。[図57]

2. 都市と田舎の結婚

田園都市は都市と田舎の長所が融合されたものであるが、その概念は結婚という言葉により表現されている。すなわち『明日の田園都市』の著者



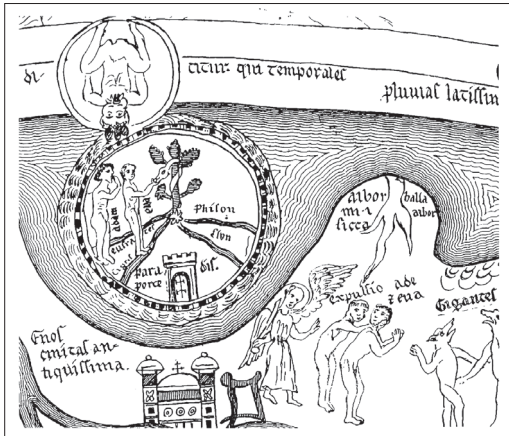


図56 エデンの園は円形の壁で囲まれ要塞化されている。その壁には一つしか門がなく、その扉は閉ざされている。ヘリフォードの大聖堂の世界地図の部分。1300年頃

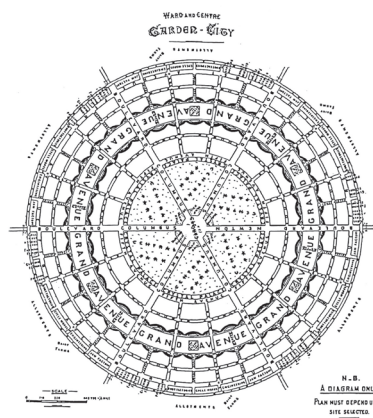


図57 同心円状の田園都市構造。田園都市のダイアグラム。著者作成。エーベネザー・ハワード『明日の田園都市』1898年

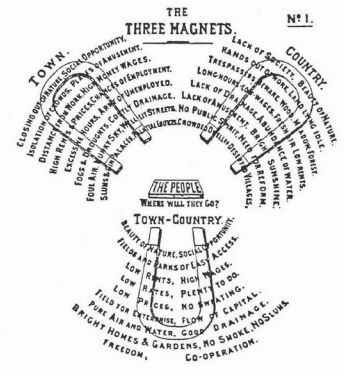


図58 「三つの磁石」田園都市のダイアグラム。エーベネザー・ハワード『明日の田園都市』1898年

序言の中でハワードは「*Town and country must be married*」と斜文字で記している。その前文では「男と女が異なる資性と能力によってたがいに補っているように、都市と農村も相互に補完しなければならない。」と述べていることを受けている。しかし結婚という言葉は明らかに心霊主義においては二つの用例を想起させる。一つはウィリアム・ブレイクが著した『天国と地獄の結婚 (Marriage of Heaven and Hell)』(1793)である。これは心霊主義者スウェーデンボルクの『天国と地獄 (De Caelo et de Inferno)』(1758)の霊肉二元論への批判を込めて、ブレイクが霊肉不可分を主張して描いたものだ。彼は矛盾する両義の合一という一元論の世界観を抱いていた。

ハワードは『明日の田園都市』の第一章の冒頭に、このブレイクの詩を引用している。そこではミルトンの『失樂園』を想起させるような田園都市のイメージと、明らかにブレイクの『天国と地獄の結婚』における一元論のイメージをハワードの「都市と田舎の結婚」に重ねているのではないかと読むことができるであろう。

もう一つの興味深い事例はアンドレーエが1616年に著した『化学の結婚 (Chymische Hochzeit)』である。「クリスティアノポリス」という同心円状の記憶術を空間化したユートピア都市を1619年に提示したアンドレーエが、薔薇十字団の錬金術的な魂の神秘的結婚の秘儀を記したものが『化学の結婚』である。錬金術の聖なる結婚とは、完全無欠の両性具有の「賢者の子」が誕生する、神の御業の儀式である。

この本はすでに1690年に英訳されていた。ここでは結婚という言葉は錬金術の金属の融合を意味

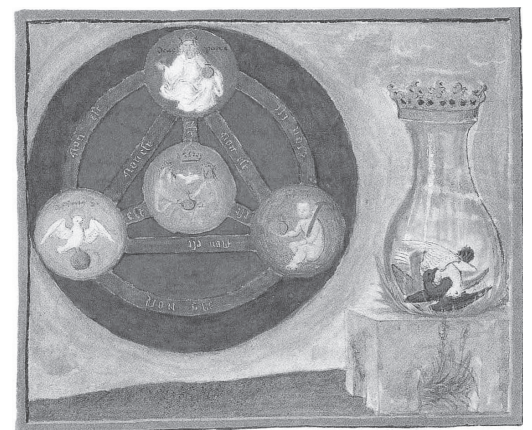


図59 錬金術とは化学実験の啓蒙書ではなく心霊世界に基づいたものである。肉体と精神と靈魂の三元は父と子と精霊の三位一体の意味を包含している。この三位一体の理念がハワードの「三つの磁石」における「結婚」へと読み換えられている。『黎明へのはじまり』15世紀

しており、それはハワードの都市と田舎の融合の考え方に沿っている。

ハワードの「三つの磁石」の図を見ていると、そこには三位一体の関係が浮上してくるであろう。[図58] ケプラーがいったように、三位一体の具現化されたものが、球や円環なのである。例えば15世紀の錬金術の『黎明のはじまり』のなかの三位一体の図では「父は永遠があり、子には独自性があり、精霊には永遠と独自性の結合がある」としている。[図59] ここで述べられている天界の父と地上の子の完全なる結合のイメージは、都市と田舎の結婚のイメージに重合してくる。

磁石とはマクロコスモスとミクロコスモスを貫く力で、二極の照応関係を引きつけあうものとして考えられていた。そうした意味でも「三つの磁石」という説明図からは、古代ギリシャから宇宙万象を貫いて生命と運動を与える神秘的な神の力

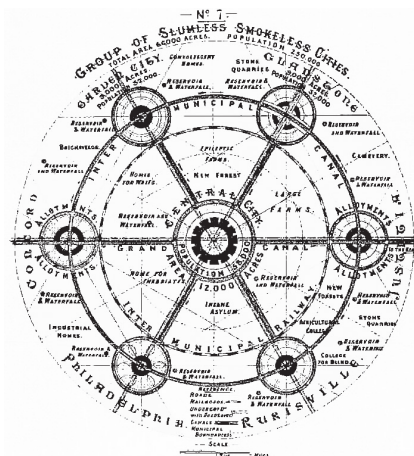


図60 「衛星都市構造」田園都市のダイアグラム。  
エーベネザー・ハワード『明日の田園都市』  
1898年

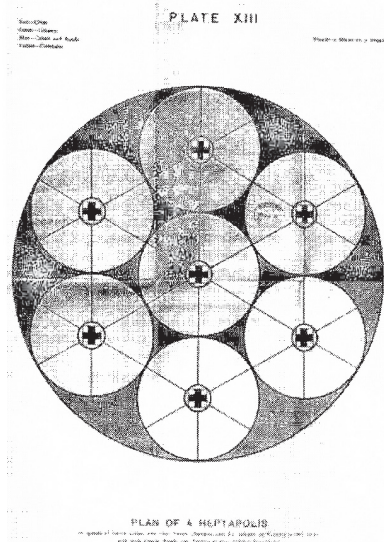


図62 「七原子都市（ヘプタポリス）」。  
その都市構成はハワードの衛星都市のダイアグラムに酷似する。  
ギーデオン・ジャスパー・アスリー『ペ  
イリンジェネシア、地球の新創世』  
1894年

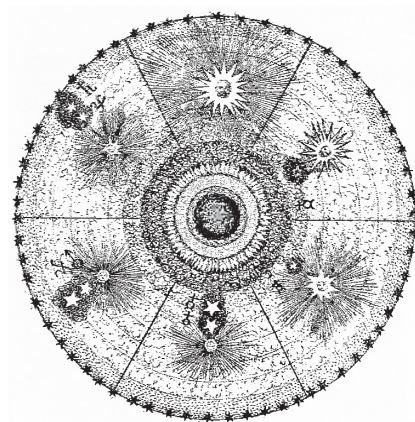


図63 フラッドの天地創造の最後の過程では、太陽ができた後に、その光線により全ての惑星が生み出される。その図像は同心円状の階層構造をもち、円が放射状に六つに分割され、それぞれに惑星が配置されている。それはハワードの衛星都市のダイアグラムを彷彿とさせる。  
ロバート・フラッド『両宇宙誌』第一巻、  
1617年

の暗喩として読み取れるとともに、両極を結び付ける力として結婚の意味を暗示しているように解釈できる。

『明日の田園都市』の序言では男女の結婚になぞらえて説明しているが、結婚という言葉は、世紀末イギリスにおいては、分裂した全体性の回復、あるいは失われた楽園の回復という心霊主義的なイメージを担っていた。

### 3. 衛星都市

オズボーンは『明日の田園都市』の序言のなかで、用語説明として衛星都市という言葉は、単なる「空地の多い郊外」あるいは「田園郊外」と差別化することを目的に、ハワードの理念にかなった田園都市に付随した専門用語として位置付けている。衛星都市は「大都市から適当な距離にあり、農村地帯により分離されている」と記している。(注109)

ハワードの衛星都市のダイアグラムでは中心の大都市（惑星）を六つのガーデン・シティー（衛星）が取り囲む大きな円で示されている。[図60] 同じように衛星都市を説明したレイモンド・アンウィン (Raymond Unwin, 1863-1940) の図と対照的である。アンウィンの図像はいかにも世俗的な表現にもとづく説明図である。[図61] 両者を対比させると、ハワードのダイアグラムがいかに観念的なものであるかが一目瞭然である。これは都市計画の図面の系統には属さない表現である。

それを理解するためにはアスリー (Gideon Jasper Ouseley 1835-1906) が1894年に出版した『ペイリンジェネシア、地球の新創世 (Palingenesia: or the Earth's New Birth)』が興味深いであろう。これは彼が1884年に着想したものである。そこに描かれた都市「ヘプタポリス (Heptapolis)」とは直訳すると七原子都市である。[図62] これは七つの教会のある七つの都市が運河と道路で結びあわされたものだ。その図像はハワードの衛星都市と全く同じである。(注110)

アスリーは非カトリックで聖書の言葉そのものを信じ、菜食主義者で霊魂転生説を主張し、1881年には統合教会同盟 (Order of At-one-ment and United Templers Society) を設立した。それは「一人の神、一つの宗教、多様な名前、多様な形態」をモットーとしていたが、間もなく活動を止めてしまった。

ハワードとアスリーのダイアグラムが驚くほど酷似しているという事実は、内容というよりも両者が非常に観念的に都市を捉えていたことが原因である。一方は星辰であり一方は原子である。両者に共通するのは円環へと観念化された都市を描いていることである。それはロバート・フラッドのプトレマイオスの宇宙像を基にした天地創造を描いた、惑星が誕生する図像を彷彿とさせずにはおかぬ。[図63]

ハワードの衛星都市のダイアグラムは、第3章第3節で言及したように地上に天界の世界観を投



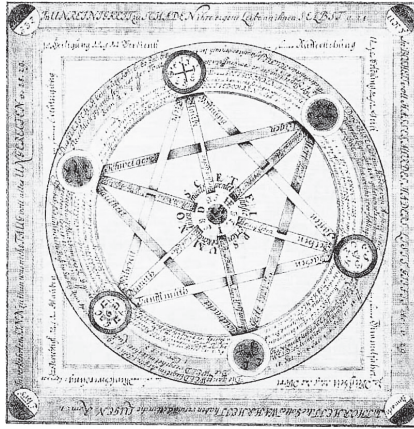


図64 錬金術では正方形から三角形あるいは円から正方形をつくるのが、精神と肉体と靈魂の均衡した関係に読み換えられていた。三角形を重ねた六線星形は天の力を意味する。  
アブラハム・フォン・ファルケンベルク  
『ラファエルまたは医天使』1639年

影したものと考えるのは素直であろう。衛星とは惑星からみれば天界のアイデアそのものといえるかもしれない。大きな円環の中央に小さな円環が同心円状に描かれ、その円環も同心円状の構造をもっている。軌道には六つの円環の衛星が回転し、それぞれの衛星は同心円状の円環構造を持っている。こうした同心円状の都市構造というのが階層的連鎖と円環の観念をもとにして記憶術と空間的に結び付いたものであることは、すでに第3章第5節で述べたとおりである。ハワードの田園都市構想とは円環の形而上学の観念の歴史の最後に顕現したものといえるであろう。

さらに指摘したいのは、17世紀に描かれた錬金術の観念図との相関である。この中に描かれた二つの三角形に注目してほしい。これは六線星形という「ソロモンの紋章」と呼ばれる魔術の図像で、星や天の力を意味する。[図64] 上を向いた三角形は神を象徴する三位一体であり、下を向いた三角形は現世の世界を象徴する。この両極が均衡した状態が六線星形である。この状態は錬金術的には化学的結婚を意味する。それをハワードの田園都市のダイアグラムと比較してみよう。六つの衛星都市を結んでいる道路のダイアグラムが六線星形を形成していることは一目瞭然である。

#### 4. 『明日の田園都市』におけるモダニズム

世紀末イギリスを田園都市という視座からモダニズムについて検証してみたい。17世紀末に迎え

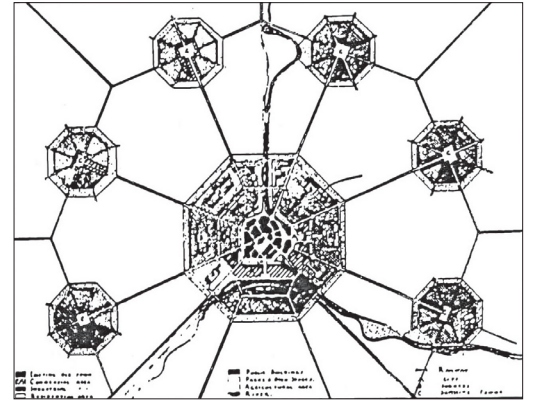


図61 イギリスの都市計画家アンウィンの描いた衛星都市の概念図。ハワードのダイアグラムと同様に六つの衛星都市が描かれているが、八角形の構造を用いており、下部が欠損している。ここには円環の観念を表現しようとする意志が認められない。  
レイモンド・アンウィン、1903年頃。

た中世の終わりの終わりで、18世紀の啓蒙主義により宗教的な世界観が一掃されたうえに、モダニズムが構築されたということは、否定されてしかるべきであろう。

気候文明史を手がかりにイギリスの建築と都市の歴史を検証した結果、判明したことは、現在よりも優れた未来を予見しようとしたときに、常に観念が先行して全体像をイメージしていかざるをえないことである。すなわち完全であるとか真理であるといったものは観念上のものであり現実にはありえない。そして世紀転換期に構想された田園都市も例外ではなかった。たとえ近代という時代においても、宗教あるいは心靈主義といった精神的なものが重要な要因として否定できない。

逆説的にいえば、純粋なモダニズムというものがあるとするならば、それは精神的なものをすべて取り去った残滓であり、意味も実態もなにもないものである。そもそも純粋なモダニズムを語り構築し実践していくための純粋な言葉や数字や文字や図像さらに人間などというものは皆無である。

イギリスの世紀転換期におけるモダニズムとしての建築や都市では、その本質的な部分において宗教的な、あるいは精神的（スピリチュアル）なものを出自としており、それを捨象して近代を語ることは、モダニズムの本質を見誤る可能性がある。ハワードの田園都市構想とは、まさにそのようなモダニズムの観念が顕現したものといえるであろう。



● 注釈

□ 第 I 部

■ 第 1 章

注1 パウル・シェーアバルト、種村季弘訳『小遊星物語』平凡社、1995年、p.290。

注2 パウル・シェーアバルト、種村季弘訳『永久機関』作品社、1994年、pp.251-253。

注3 ジョルジュ・ブーレ、岡三郎訳『円環の変貌』上巻、国文社、1973年、pp.65-72。

注4 グスタフ・ルネ・ホッケ、種村季弘訳『文学におけるマニエリスム I』現代思潮社、1977年、pp.195-197。

注5 ジョン・ダン、湯浅信之訳『ジョン・ダン全詩集』名古屋大学出版会、1997年、pp.53-54。

注6 木下薫「ジョン・ダンの Songs and Sonnets における「空間」と「時間」の変容」、創価大学英語英文学研究第28巻第2号、2004年3月、pp.89-105。

注7 注5、pp.53-55。

注8 形而上詩人は無限に広がった無表情の新しい宇宙空間を深刻に恐怖した。膨張して張り裂けていく宇宙をまとめようとした。形而上詩人の描いた小宇宙とは、混沌と不安の時代に、大世界に存在する均整や調和の原型としての小さな世界であった。川崎寿彦『ダンの世界』研究社、1967年、pp.120-141。

注9 ヴォーンは自然の中に神の霊が内在し、被造物と神との霊交を重視し、自然の万物への神の恩寵や慈悲を求めて、神を仰ぎ見ようとしている。荒川光男『心靈思想と形而上詩人達』松柏社、1977年、pp.149-179。

注10 神を光とする神秘主義的瞑想は思弁的である。ここには新プラトン主義の溢出の原理を認めることができる。溢れ出て宇宙に漲る神の力が、太陽から溢れ出る光の比喩で語られている。ピーター・ミルワード、石井正之助訳『形而上詩と瞑想詩』荒竹出版、1976年、pp.159-179。

注11 大宇宙の照応としての小宇宙は透明で内部が見える。それは水晶、ガラス、真珠そして凍結した水のような鉱物質であると同時に発光体である神聖化された物質である。それは詩のなかでシャボン玉として表現されることもある。それは空洞であり束の間の壊れやすいものである。ブルーノ・タウトのクリスタルハウスではシャボン玉が折り重なったものとして描かれているのは興味深い。注3、pp.70-79。

注12 マーヴェルの詩では、心が瞑想して恍惚の状態へ達すると、天的美の瞑想に移行していく。魂が天であるイデア界に向かって飛翔していく準備に入っている。これは新プラトン主義の流出の理論を彷彿とさせる。川崎寿彦『マーヴェルの庭』研究社、1974年、pp.123-127。

注13 マーヴェルは17世紀の形而上詩人のなかでも最も円環を魅力的に描いた人物である。たとえば『バミュダ島』『ビルバロウの丘と森』『一滴の露』である。M. H. ニコルソン、小黒和子訳『円環の破壊、17世紀の英詩と新科学』みすず書房、1999年、pp.110-124。

■ 第 2 章

注14 天使の階層は6世紀にディオニュシオス・アレオバギデスが著した『天上位階論』にもとづいている。彼は天使の秩序組織と機能を初めて体系化して示した。三つの位階にはそれぞれに三つの階層がある。しかしこの体系は当時受け入れられず、再評価されたのは13世紀の頃である。そしてダンテ (Dante Alighieri 1265-1321) の詩編『神曲』(1307-1321) の天国編で、彼の階層的宇宙構造が踏襲された。その後ミルトン (John Milton 1608-1674) の『失楽園』(1667) において受容されて定着する。佐々木英也『天使たちのルネサンス』日本放送出版協会、2000年、pp.15-23。

注15 アーサー O. ラヴジョイ、内藤健二訳『存在の大いなる連鎖』晶文社、1975年。

注16 当時の宇宙観を総合的に著した人物とはフランチェスコ・ジョルジ (Francesco Giorgi 1460頃-1540) の『世界の調和について』(1525) である。ここでは新プラトン主義、ピュタゴラス

の数秘術、グノーシス主義、ウィトルウィウスの建築理論さらにユダヤ教神秘主義カバラを統合し、大宇宙と小宇宙の調和した世界観が述べられている。フランセス・イエイツ、内藤健二訳『魔術的ルネサンス、エリザベス朝のオカルト哲学』晶文社、1984年、pp.53-60。

注17 山本通「アングリカン広教主義における科学と社会、ジェイコブ・テーズをめぐって」神奈川大学商経論叢第45巻第4号、2010年3月、pp.161-184。

■ 第 3 章

注18 コリーン・マクダネル&バーンハード・ラング、大熊昭信訳『天国の歴史』大修館書店、1993年、pp.157-217。

注19 注18、pp.257-306。

注20 注18、pp.321-358。

注21 J. プレスト、加藤暁子訳『エデンの園、楽園の再現と植物園』八坂書房、1999年、pp.40-42。

注22 ロバート・ヒューズ、山下主一郎訳『西絵絵画に見る天国と地獄』大修館書店、1997年、pp.47-55。

注23 新約聖書翻訳委員会訳『ヨハネの黙示録』岩波書店、1996年、pp.127-131。

注24 藤井治彦『「失楽園」思想としての空間』研究社、1983年、pp.97-98。

注25 マーヴェルはこのときに「アップルトン屋敷を歌う」という詩を残している。ここでは天上の楽園と地上の理想の庭のなかで茂り育つ美德というテーマが詠われている。詩のなかでアップルトン邸の大広間の丸天井は達成された美德の象徴として、正方形の部屋と対比されている。注12、pp.193-240。

注26 注25、pp.123-130。

注27 松島正一「愛とエロス、ジョン・ダンの詩を読む」学習院大学文学部研究年報第58輯、2011年度、pp.134-170。

注28 ロイ・ストロング、圓月勝博訳『イングランドのルネサンス庭園』ありな書房、2003年、pp.244-245。

注29 若桑みどり『マニエリスム芸術論』岩崎美術出版社、1986年、pp.23-25。

注30 ベーコンは随想のなかで「庭園は正方形をなしていて、四辺をすべて壮麗なアーチ形の生け垣で囲むのが最上である。」そして「私は中央に立派な築山を設け、三つの上り段をつけて小道をつくりたい。その小道は築山を一周する平坦な道にし、土塁とか盛り上げとかはつけないことにしたい。そして築山全体を30フィートの高さにし、ちよつとしゃれた宴会場をもうけたい。」と述べている。フランシス・ベーコン、渡辺義雄訳『ベーコン随想集』岩波書店、1983年、pp.200-206。

注31 注28、pp.256-260。

注32 フランセス・イエイツ、玉泉八州男訳『記憶術』水声社、2003年、pp.417-422。

注33 宮地信弘「露の雫は星の彼方のミルラの丘から：ヘンリー・ヴォーンの想像力の一側面について」三重大学教育学部研究紀要、人文社会科学、1992年、pp.61-76。

注34 伊東俊太郎『近代科学の源流』中央公論社、2007年、p.55。

注35 アグネス・アーバー、月川和雄訳『近代植物学の起源』八坂書房、1990年、p.192。

注36 ニコラス・キャンピオン、鏡リュウジン訳『世界史と西洋古星術』柏書房、2012年、pp.100-103。

注37 桑木野幸司『叡智の建築家、記憶のロクスとしての16-17世紀の庭園、劇場、都市』中央公論美術出版社、2013年、pp.262-263。

注38 注37、pp.243-261。

注39 桑木野幸司「16世紀イタリアの植物園にみられる象徴性と審美性について、アゴ스티ーノ・デル・リッチョ (1541-98) の理想庭園構想に関する研究」日本建築学会計画系論文集第537号、2000年11月、pp.283-288。

注40 注37、pp.263-269。

注41 ドミニコ会修道院は12世紀から13世紀にかけてライン河流域一帯に設立された。ケルン、コルマール、コンスタンツそしてシュトラスブルクである。こうした修道院は神秘主義の

一思潮をつくったとされ、マイスター・エックハルトやヨハネス・タウラーといったドイツ神秘主義思想家が活躍した。三宅理一著『マニエリスム都市、ストラスブルクの天文時計』平凡社、1988年、pp.67-71。

注42 桑木野幸司「ロクス・アモエヌス（心地よき場）としてのルネサンス庭園と場所記憶術、アゴスティエーノ・デル・リッチョ（1541-98）の理想庭園計画にみられる記憶術的空間構成と百科全書的知の表象」日本建築学会計画系論文集第569号、2003年7月、pp.239-244。

注43 すでにクインティリアヌス『弁論術教程』において記憶術は建築的空間構成と関連付けられていた。それが顕現したものとして植物園があった。天国や地獄ばかりでなく、観念を具現化するときに庭園や建築が援用されるということは、逆にいえば、建築とは観念を抜きにして理解することは不可能であるということを意味する。注32、pp.146-290, 413-446。

注44 注41、pp.118-120。

注45 ウィトルウィウスは『建築十書』の第四書、第五書、第九書においても占星術と建築との関係について言及している。ウィトルウィウス、森田慶一訳『ウィトルウィウス建築書』東海大学出版会、1976年、pp.233-235。

注46 ジュリオ・カミッロ（Giulio Camillo 1480-1544）が1550年に著した『劇場のアイデア』とは、当時の記憶術と占星術あるいは新プラトン主義とウィトルウィウスの劇場建築の理念が統合された最も確かな事例といえるであろう。なぜならば彼の劇場には惑星を象徴し、新プラトン主義とデミウルゴスのつくった七人の統治者がおり、七本の柱と七区画の場と七つの扉があるからである。注32、pp.169-182。

注47 ピーター・J. フレンチ、高橋誠訳『ジョン・ディー、エリザベス朝の魔術師』平凡社、1989年、pp.11-25。

注48 フランセス・イエイツ、前野佳彦訳『ジョルダノ・ブルーノとヘルメス教の伝統』工作社、2010年、pp.288-345。

注49 フランセス・イエイツ、藤田実訳『世界劇場』晶文社、1988年、pp.58-82。

注50 注49、pp.119-136。

注51 常山菜穂子「丘の上の地球座、初期アメリカ・ピューリタンの説教と世界劇場」慶応義塾大学藝文学会藝文研究第75巻、1998年12月、pp.348-369。

注52 社会学者ジャン・セルヴィエはユートピア文学の持つ9つの特徴を指摘している。ユートピア都市が現実の世界と対比させ差異化を強調する手段として、都市構造が重要な役割を果たしていると解釈ができるであろう。北村直子「ユートピア旅行記における固有名と視点人物、文学ジャンルの物語戦略的思考」京都大学人文科学研究所『人文学報』第105号、2014年6月、pp.35-67。

注53 プラトン、種山恭子、田之頭安彦訳『プラトン全集12 ティマイオス、クリティアス』岩波書店、1975年、pp.304-306。

注54 カンパネッラ、坂本鉄男訳『太陽の都、詩篇』現代思潮社、1989年。

注55 ヨーハン・ヴァレンティン・アンドレーエ、種村季弘訳『化学の結婚』紀伊国屋書店、1993年、pp.298-306。

注56 注41、pp.216-219。

注57 ライナルド・ベルギーニ、伊藤博明、伊藤和行訳『哲学的建築、理想都市と記憶劇場』ありな書房、1996年、pp.24-28。

注58 注37、pp.406-411。

□ 第Ⅱ部

■ 第4章

注59 桜井邦朋『太陽黒点が語る文明史、小氷河期と近代の成立』中央公論社、1987年。

■ 第5章

注60 ラヴジョイは、18世紀へ至るまでの歴史で認識された「存在の連鎖の観念」が、19世紀に入るとダーウィンの「進化論」により「発展や進化の観念」へとパラダイム・チェンジしたと指摘

している。アーサー・O. ラヴジョイ、鈴木信雄訳『観念の歴史』名古屋大学出版会、2003年、p.304。

注61 キャスリーン・レイン、吉村正和訳『ブレイクと古代』平凡社、1988年、pp.228-231。

注62 ブライアン・フェイガン、東郷えりか訳『歴史を変えた気候大変動』河出書房新社、2001年、pp.195-285。

注63 ピーター・ワシントン、白幡節子訳『神秘主義への扉』中央公論新社、1999年、pp.18-25。

注64 ジャネット・オープンハイム、和田芳久訳『英国心霊主義の抬頭、ヴィクトリア朝時代の社会精神史』工作舎、1992年、pp.94-158。

注65 『キリスト教神秘主義著作集16 近代の自然神秘主義』教文社、1993年、pp.564-566。

注66 ジョスリン・ゴドウィン、吉村正和訳『交響するアイコン、フラッドの神聖宇宙』平凡社、1987年、p.313。

注67 岩岡中正「イギリス・ロマン主義政治思想覚え書、シェリーとコールリッジ」熊本大学法学部紀要第36号、1983年5月、pp.185-211。

注68 注61、pp.23-238。

注69 注62、pp.271-283。

注70 原田健次郎『ケンブリッジ・プラトン主義、神学と政治の連関』創文社、2014年、pp.17-50。

注71 リチャード D. オールティック、要田圭治訳『ヴィクトリア朝の人と思想』音羽書房鶴見書店、1998年、pp.308-339。

注72 アンリ・エレンベルガー、木村敏、中井久夫監訳『無意識の発見』弘文堂、1980年、pp.327-328。

注73 注63、pp.22-25。

注74 ガーミニ・サルガードー、松村起訳『エリザベス朝の裏社会』刀水書房、1985年、pp.80-210。

注75 ホームはナポレオン三世のフランス宮廷、アレクサンドル二世のロシア宮廷、ナポリ王、ドイツ皇帝、オランダ女王、フィレンツェのトスカナ大公そしてローマ法王にも謁見し、霊能力を披露している。三浦清宏『近代スピリチュアリズムの歴史』講談社、2008年、pp.79-98。

注76 心霊研究協会（Society for Psychial Reserch）の母体は1850年頃に創設されたケンブリッジ大学の幽霊協会と、1879年に創設されたオックスフォード幽霊学協会である。この協会に属したのは神経学、哲学、倫理学、地質学、生物学、物理学の研究者たちであり、このため協会は知的な研究者サークルとなった。研究対象は潜在意識、思考伝達、自動筆記、自動発話、テレパシー交信、催眠術である。この協会は科学的精神を自認して知的な地位を保っていた。注64、pp.51-184。

注77 注63、pp.79-98。

注78 注64、pp.375-406。

注79 注64、pp.46-210。

■ 第6章

注80 水田珠枝『女性解放思想史』筑摩書房、1979年。

注81 今岡健一郎、星野貞一郎、吉永清『社会福祉発達史』ミネルヴァ書房、1979年。

注82 注64、pp.238-243。

注83 注63、pp.78-98。

注84 山崎洋子「イギリス新教育運動における両義的可能性とパースペクティヴ、「共同体」と「学級」へのアプローチにもとづいて」鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）第20巻、2005年、pp.131-145。

注85 田中尚美「イギリスにおける、モンテッソーリ教育運動 1919-1929」神戸海星女子学院大学研究紀要第53巻、2014年、pp.35-44。

注86 岩間浩『ユネスコ創設の源流を訪ねて、新教育連盟と神智学協会』学苑社、2008年、pp.14-69。

注87 イギリスの新教育運動のもとで新しい学校の設立に参加した人々や団体のなかに新生活連盟（Fellowship of the New Life）がある。彼らは精神的なものを尊重した社会主義的平和主義者であり、スウェーデンボルクの心霊主義の影響を受けた人々

が参加していた。経済は社会主義、理想は共産主義、政治は平和無政府主義であった。この連盟にはフェビアン協会、菜食主義、トルストイ主義、キリスト教社会主義の人々が関与していた。彼らはガーデン・シティー運動のほかにセツルメント運動や大学拡張運動に参画していた。ロバート・オーエンの孫オーエンもメンバーの一人である。山崎洋子「イギリス新教育運動における「自由」の宗教的性格、なぜ哲学者J. S. マッケンジーは「教育の新理想」運動にコミットしたのか」鳴門教育大学研究紀要(教育科学編)第19巻、2004年、pp.121-135.

注88 Ebenezer Howard, Peter Hall, Dennis Hardy, Colin Ward "TOMORROW A PEACEFUL PATH TO REAL REFORM" Routledge, 2003, p.3.

注89 吉村正和『心霊の文化史、スピリチュアルな英国近代』河出書房新社、2010年、pp.206-207.

注90 山本通『近代英国実業家たちの世界、資本主義とクエイカー派』同文館、1994年。

注91 田園都市レッチワースの教会については非国教会派が<sup>13</sup>、国教会派が<sup>7</sup>、カトリックが<sup>2</sup>であり、注目すべきは神智学協会が設立されていたことである。西山八重子『イギリス田園都市の社会学』ミネルヴァ書房、2004年、pp.83-86.

注92 注89、p.210.

### □ 第Ⅲ部

#### ■ 第7章

注93 注89、pp.186-188.

注94 報告のなかでハワードは物質と精神の相関関係についてジョン・ティンダル (John Tyndall 1820-1893) やトマス・ハクスリー (T. H. Huxley 1825-1895) などの自然科学者の研究を引用して述べている。この二人の科学者は、当時のイギリスで最も有名な議論のサークルである「メタフィジカル協会」の中心的人物で、心霊主義に懐疑的な代表的研究者たちであった。こうした科学者に対してハワードは、物質的な現象や作用が<sup>5</sup>心霊的な力の現れであると述べている。注89、pp.188-190.

注95 注88、p.29.

注96 東秀紀『「明日の田園都市」への誘い、ハワードの構想に発したその歴史と未来』彰国社、2001年、p.5.

注97 注89、pp.191-196.

注98 注89、p.190.

注99 吉村正和「オーウェン共同体と世俗的千年王国」、名古屋大学『言語文化論集』第29巻第2号、2008年3月31日、pp.269-287.

注100 中川雄一郎「イギリス近代協同組合運動と友愛組合」、明治大学図書館紀要『図書の譜』2000年3月、pp.1-15.

注101 永井義雄『ロバート・オーウェンと近代社会主義』ミネルヴァ書房、1993年、pp.48-49.

注102 注88、p.131.

注103 浅井信雄『アメリカ50州を読む地図』新潮社、1996年、pp.141-145.

注104 ルイス・マンフォード、関曠野解説、月森左知訳『ユートピアの思想史的省察』新評論、1997年、pp.176-178.

注105 Robert Fishman "Urban Utopias in the Twentieth Century: Ebenezer Howard, Frank Lloyd Wright, Le Corbusier" The MIT Press, 1994, pp.52-55.

注106 吉村正和『近代魔術』河出書房新社、2013年、pp.39-40.

注107 アルバート S. ライオンズ、鏡リュウジン監訳『図説世界占術大全』原書房、2002年、pp.87-88.

注108 伊藤博明『綺想の表象学、エンブレムへの招待』ありな書房2007年、pp.320-323.

注109 E. ハワード、長素連訳『明日の田園都市』鹿島出版会、1989年、p.41.

注110 注88、pp.159-161.